

陸上運動部部便り

2009年10月号

京大戦・箱根駅伝予選会

目次

1	京大戦	1
1.1	監督の言葉	1
1.2	主将の言葉	2
1.3	女子主将の言葉	2
1.4	試合経過	3
1.5	試合結果	11
2	箱根駅伝予選会	13
2.1	監督の言葉	13
2.2	長距離チーフの言葉	14
2.3	大学院駅伝主将の言葉	15
2.4	出場選手の言葉	16
2.5	試合結果	25
3	新監督就任の言葉	26
4	新主将・新女子主将・新主務・新長距離チーフの言葉	26
4.1	新主将の言葉	26
4.2	新女子主将の言葉	26
4.3	新主務の言葉	26
4.4	新長距離チーフの言葉	27
5	自己記録更新者一覧 2009.9.13~10.17	27
6	2009年度部内5傑 2009.10.17現在	27
7	主務より	29
7.1	応援OB・OG紹介	29
7.2	行事予定	31
7.3	学生幹事の交代	31
7.4	連絡先(慶弔等)	31
7.5	その他	31
8	編集担当より	32

1 京大戦

1.1 監督の言葉

監督 寺田秋夫

男子：実力を出し切り優勝。

女子：善戦するも波乱に泣く。

男子第82回、女子第8回となる京大戦は、小雨交じりで蒸し暑いコンディションの中、駒場での開催となりました。今年のチームは「女子の活躍に勇気もらい、男子は持てる力は額面通りに出していく」という展開でここまできました。今回も女子は両校の各種目エースの力は接近しているものの一橋戦に続き勝利をとの勢いで強気、男子はやや歩が悪いが、双方低レベルな種目で上乘せをしてマイルリレーまでは勝負をつけさせない、というのが私の期待と目標でした。ところが、一週前に、男女ともエースクラスが体調不良で出場不可能となり、非常に厳しい状況となり「京大も全員が万全はあり得ないので絶対勝つつもりで臨もう」と部員に強気で取り組むように話しながら当日を迎えました。

男子は最初の種目100mで3点負けを覚悟していたところを、正しく京大の主戦が怪我で出場せず、準エースも不調で、本学の3点勝ちでスタートします。続く鬼門の1500mも5点負けで凌ぎ流れにのりだし、やられるのは何度となく見ましたが、やるのは久しぶりの110mH(79年ぶり)、200m(35年ぶり)でのスコンク勝ちを果たし、トラックで大きく勝ち越します。他方、苦戦覚悟のフィールドでもハンマー投げで寺島(4年)が3連覇を果たし対校得点を1点負けに抑え、最悪0点も覚悟した棒高跳びでは、選手が状況をよく理解し屈辱的な高さから試技をして、上位独占は許したものの6点を確保し、苦手種目の走高跳びは1点勝ち越すなど、各レベルで持てる力を発揮しフィールドで10点負けに抑え、結果的に全19種目中13種目で1位をとり完勝となりました。

但し、楽勝と見ていた両リレーでは後塵を拝し、大差をつける予定だった5000m競歩では京大の1番手

の驚異的な粘りで2位はとられるなど京大の勝負への執着心には毎回頭が上がりません。京大のエースが不調ということが今回の本学の勝因でもあり手放しには喜べない点もありますが、大砲がなく苦勞した一年の最後に総力戦で力を出したことへのご褒美を頂いた形です。

他方、女子は最初の100mで何とか2点負けには抑えたいと思っていたところを、久保木・鈴木の1年コンビで大健闘し、鈴木は最後に京大主将にかかわれますが、2点勝ちと上々で滑り出し、800mでも主将日下が格上の京大岩橋(1年)に勝つべく敢然とハイペースで引っ張り続け最後は力尽きましたが、後方でも浜松(1年)が自己と同等の持ち記録の京大選手を引っ張り続け、最後の直線で気合いで突き放し同点に持込み勢いをだします。幅跳びでも高山(3年、次期女子主将)が久しぶりの公認5m超えを出して気を吐き、正念場の400mを迎え、ここでも日下が積極的に走り岩橋を相手にせず1位となりこの種目を引き分けとし、リレーでは歩がある東大が優勝する公算が大きくなります。3000mは上位独占を許しても仕方がない状況でしたが、一度は離された杉浦(1年)が最後の直線で驚異的なスパートを見せ2位を奪取し、良い雰囲気最終種目の4x100mを迎えます。ところが、どこに魔物が潜んでいたのやら、バトンさえ繋げば勝てると思っていたところで1・2走でバトンを最初の呼吸で渡し損ない、黄旗も上がりよもやの失格となってしまう、対校総合得点も2点負けとなってしまいました。

女子チームは内容も良く、各種目で実力以上の結果を出しながら戦い、負けたことが実感できない終わり方となってしまいました。最後にバトンが渡らなかつたのは酷な結末でしたが、4年生が抜けても種目バランスも良く、今後も熱く戦ってくれそうなチームですので、まだ頑張る余地があるという天からの声だと前向きに捉えて来シーズンに向かってくれると思います。結果的には男女とも「対校戦は終わってみないとわからない」ということを再確認させられた試合でした。

さて、私事ですが、4年間監督を務めさせていただきましたが今期をもって退任させていただきたいと存じます。後任は、三段跳びで現役で活躍中の2005年卒藤田靖浩さんをお願いしたいと思います。藤田さんは最後のインカレ1部選手で、今も仕事の傍ら、駒場にも足を運び、日本選手権等で活躍されていますので、背中引っ張って行ってくださると思います。今後とも東大陸上運動部に変わらぬご指導ご鞭撻を

賜りたく重ねてお願い申し上げます。

1.2 主将の言葉

主将 廣瀬彬

今シーズン最後の対校戦である京大戦。ランキング通りいけば約20点差で、地の利を考慮して上積みしても数点差で敗戦が予想され、戦前は厳しい戦いを強いられることが予想されました。しかしフタをあけてみれば、スコクされてもおかしくなかった100mで勝ち越し、200mにいたっては逆にスコクし、有利と予想されていた400m、5000m、110mH、400mH、三段跳でスコクかそれに準ずる形できちり勝ち越すなど、結局総合で14点差をつけて勝利することができました。1ヶ月前の一橋戦から考えると信じられない結果ですが、僕としては結果を出せるはずの選手がやっと本領を発揮したなという思いでした。今年は気持ちよく終われた対校戦がなく、チームとしても個人としてもみんな本当に悔しい思いをしたと思います。特に高校時代結果を出していた選手、冬しっかり練習が積めたのに怪我をしてしまった選手を見ていて、僕も本当に歯がゆい思いでした。しかし、今回の京大戦では短距離を中心にそういった選手が復活し、それに看過されて他の選手もしっかり結果を出すことができました。今シーズンを締めくくる対校戦として、また来シーズンにつなげるといった意味でも、本当に良い試合であったと思います。当日応援に来てくださった先輩方の声援は本当に力になりました。ありがとうございました。

今回の京大戦をもちまして、僕が主将として引っ張ったこのチームも終わりをむかえます。去年尾崎前主将からチームを引き継いで、「史上最強の東大陸上部への第二步」を踏み出すということを目指してきました。僕は口下手で言葉で引っ張ることはできないので、僕自身が結果を出して背中引っ張っていくつもりでしたが、関カレでは表彰台を逃し、僕自身の大学4年間の目標でもあった全カレには出場できず、結局思っていたようにはできませんでした。しかしそのことでみんなに危機感を煽ることができたのが、時間が経つにつれ精神的にも身体的にも本当に成長し、今回の京大戦の結果につなげることができました。来シーズンは新主将の酒谷を先頭に、より成長して結果の出せる集団になれると確信しています。

最後になりましたが、この一年間最後まで結果が

出なかったにもかかわらず、変わらずご支援、ご指導していただき、本当にありがとうございました。

1.3 女子主将の言葉

女子主将 日下桃子

今回の京大戦は、事前の予想では京大女子主将の富田さん、スーパー1年生の岩橋さんが強く、二番手争いも互角で、すべてうまくはまってどうにか接戦に持ち込めるか...という状況でした。その上、短距離の清水(4年)が気管支炎で欠場することになってしまい、厳しい情勢かと思われました。しかし、チームのムードはとても熱く、言葉は悪いですが、京大両エースを潰し、二番手争いにも競り勝ち意気込みが皆に感じられ、頼もしい限りに思っていました。そして、実際に戦いが始まってみると、互いに勇気づけ合いながら、その熱い気持ちどおりの素晴らしいレース、試技を繰り上げることができ、2点勝ち越しで最後のリレーを迎えました。まさかのオーバーゾーンによる失格で一気に4点もぎとられてしまい、負けを喫してしまいましたが充分すぎるほどよくやってくれたので、誇りと感動で胸がいっぱいです。

私はこれで引退となり、2年間務めさせていただいた女子主将は3年の高山に引き継ぎとなります。高山は1年生の時の大きな怪我から立ち直った、優しく強い5mジャンパーです。彼女の下で後輩達も伸び伸びと成長してくれるでしょう。これからも女子チームへの温かいご声援とご指導をよろしく願います。

今までこの伝統ある東大陸上運動部で、大きな声援を受けながら、プレイヤーとして、女子主将として、陸上競技ができて幸せでした。支えてくださったOBOGの皆様、監督、八田先生、工藤さん、チームメイトの皆様、本当にありがとうございました。

1.4 試合経過

トラック

10:15 男子100m 決勝

3レーンに春日(2年)、5レーンに都井(4年)、7レーンに西田(3年)の出場。京大戦の初陣となるレース。吉田、眞武の京大10"台コンビと200mで21"台のベストを持つ久保に大量失点することを想定していたが、久保不調の情報に加え、吉田の欠場

が判明。何とか1点負け程度に抑える目処が立った。春日は怪我も癒え、一橋戦OPで好走しており、西田は跳躍選手で、本業ではないながら、スプリントでもエース級に成長している。後は、一橋戦でスタートに難があった都井に最上級生としての意地を見せてほしい。

雨の中、号砲が鳴る。ほぼ横一線ながら、京大眞武が序盤1人抜け出す。その後を中盤から西田が追う形でレースが展開。ゴール直前、眞武は勝利を確信してか、トルソーを決めずに、西田は対照的に、大きな体を思い切り突き出してフィニッシュ。眞武の勝利かと東大応援団も思う中、最後の粘りが功を成し、西田が10"95で1位をさらった。春日は、スタートからフィニッシュまで持てる力を十分に発揮し11"14の3位、都井は京大2番手藤澤と競り合っていたが、わずかに及ばず、11"28の5位でそれぞれフィニッシュした。この時の風は追い風2.0mであった。

風は良かったものの、雨で濡れて滑りやすい状況の中、西田は自己ベストで関東インカレB標準突破、春日は大学ベスト、都井もベストに近い走りをし、京大に3点勝ち越すという最高の形で大会をスタートしてくれた。

10:20 女子100m 決勝

3レーンに鈴木(1年)、5レーンに久保木(1年)の出場。病欠の清水(4年)に代わり鈴木が対校戦100mに初出場となった。ハードル専門でフラットレースにはあまり出てないと言う久保木だが、100mHで15秒台の実力を持つ彼女には優勝の期待がかかった。そして試合慣れしている久保木に対し、大学から陸上を始めた鈴木は悪天候のコンディションがどう左右するのが注目された。

期待と不安を併せ持ちつつ号砲。スタートと同時に久保木が他の3人よりも1歩前が出る。鈴木も良いスタートを見せ、京大の富田と並ぶ形となった。前半で飛び抜けた久保木はトップスピードに乗りレースを主導する。そのまま京大の富田をかわし切り13"15の1位でゴールした。一方の鈴木

は前半の滑り出しに比べ、後半動きが固く伸びが見られない。50m 過ぎからしだいに離され 13"41、3 位でのゴールだった。両者ともにコンディションが悪い中で自己ベストで、女子最初の種目として順調なスタートだ。1 走鈴木と 2 走久保木の女子 4 × 100mR にも期待がかかる。

久保木はフラットレースに本格的に取り組めば関東 IC 出場も十分可能な力強い走りをしてくれた。鈴木は走行フォームに改善の余地があり、後半の走りに影響していると思われた。しかし陸上 1 年目の記録にしては目を見張るものがある。冬季練習期間、フォーム改善に取り組めば久保木に負けないスプリンターになってくれるだろう。来シーズンは男子以上に短距離を引っ張るコンビに成長することを期待する。

10:30 男子 1500m 決勝

石川 (4 年)、竹内 (2 年)、山田 (2 年) の出場。頭一つ抜けている優勝候補の京大小山兄弟に東大勢がどれだけ絡んでいけるかが見所である。下位でも得点を取りこぼさないことが対校勝負のカギとなる。

スタートから小山兄弟が先頭を引っ張り、東大勢は集団の 3~5 番手につく展開。400m の通過は 64"。2 周目も全く同じ展開で集団のまま 800m の通過は 2'10"。ここからレースが動き始める。小山兄弟がスピードを上げ、集団が縦長になっていった。山田、竹内はくらいついたが、石川は対応できず、京大の 3 番手の選手に抜かれてしまう。小山兄弟はラストの鐘が鳴るとさらにペースを上げて独走体勢。山田もペースを上げて 3 番手を確保し、勝負は竹内と京大の 3 番手の選手との 4 位争いに絞られる。先頭は小山兄弟がワンツーフィニッシュ。5 秒ほど遅れて山田も 4'06"90 の 3 位でゴール。竹内はラスト 200m でスパートをかけて京大の選手を突き放し、4'10"55 の 4 位でゴール。石川は終盤は離されてきつい走りとなり、4'20"62 の 6 位でゴール。

対校得点は京大の 5 点勝ち。京大の得意種目において最低限の得点は獲得することができた。山田は先頭 2 人には絡めなかったが安定した力を見せ、竹内もタイムには

若干不満があるもののしっかり仕事を果たした。石川は終盤で離され残念ながら得点争いには絡めなかったが、持てる力を発揮し 4 年生最後の対校戦を有終の美で終えた。

10:45 男子 110mH 決勝

2 レーンに増本 (3 年)、4 レーンに酒谷 (3 年)、6 レーンに江間 (3 年) の出場。降りしきる雨の中、レースは行われる。先ほどの 100m では下馬評をくつがえし、東大が勝ち越し。この流れに乗り、この種目では東大のスコンクが期待される。

号砲が鳴る。序盤から東大 3 選手が京大より抜きで展開。中盤まで 3 人で 1 位争いを繰り広げるが、後半酒谷が飛び出しそのままゴール。続いて増本、そして江間がなだれ込む。結果は酒谷が 1 着で 15"33、増本が 2 着で 15"61、江間が 3 着で 16"12、風は + 0.6m であった。増本、江間がベストを更新し、スコンクで勝利、素晴らしい結果であった。この流れに乗って、残りの短距離種目の勝利が期待される。

11:50 男子 400m 決勝

2 レーンに拙島 (2 年)、4 レーンに原 (3 年)、6 レーンに大澤 (1 年) の出場。PB まで実力を戻しつつある拙島、大澤の潜在力に懸ける一方、原の堅実さを取り込む構えである。

号砲が鳴る。3 人とも前半から飛ばすつもりか、入りから快調にスピードを上げ、上位を保ってバックストレートに入る。150m 付近で京大の萩生がぼんと抜け出す。大澤と拙島は落ち着いてこれに対応。200m 過ぎから拙島が踏ん張り、トップを奪い返す。2 位以下は第二曲走路出口付近で再び混戦状態となるが、原は前半飛ばし過ぎたのかじりじりと後退。大澤は苦しい状態となるが踏ん張り歩を進め、粘って粘って 2 位にまで上がってくる。拙島は圧倒的差をつけ 49"47 の 1 位でフィニッシュ。大澤も混戦から辛うじて抜け出し 50"77 の 2 位で駆け込んでくる。3-6 位まで極めて僅差となるが、ここでまさかの萩生が転倒。京大の山瀬に差されたものの原が 52"82 の 4 位でフィニッシュした。

この勝利に乗って 1600mR では完全勝利

を期待したいところである。

11:55 女子 800m 決勝

日下(4年)、浜松(1年)の出場。4年日下は引退試合でもあり、実力上位である京大の1年岩橋選手に食らいついてもらいたいところである。浜松は相手の2番手とシーズンベストが拮抗しているため持ち前の勝負根性で先着を狙う。スタートと同時に飛び出す日下。岩橋選手に臆することなくハイスピードで飛ばしていく様は、「これぞ中距離」といったところである。一方の浜松は京大の選手と共にレースを進めていき、どちらもラスト勝負になりそうな予感。日下はラスト一周、ラスト200mと徐々に岩橋選手に離されていくがそれでも諦めず最期スパートをし、2'22"80の2位でゴール。一方、浜松は京大の選手とラスト100mの勝負となる。普段の練習からスパートに光るものがある浜松は対校戦でも遺憾無くそのスパートを発揮し、2'31"65の3位でゴール。対校得点としては同点であった。日下はこれで引退となるが、浜松には来シーズンもうひとつ上のレベルの舞台でそのスパートで演じてもらいたい。来年以降の岩橋選手との勝負が楽しみである。

12:15 男子 4 × 100mR 決勝

5レーンに中嶋(4年)-都井(4年)-舩島(2年)-春日(3年)の順で出場。朝一番の100mを手堅く勝ち越した今、リレーでも順当な勝利を望みたいところ。対する京大は不調の久保に代え秋元、山田を投入してきた。フラットレースタイムの単純計算ではほぼ均衡した実力となっているが、リレーで下馬評を信用することはできない。是非とも勝利して午後の競技に弾みをつけたいところである。

号砲とともに中嶋がスパートをかける。すっかりお馴染みとなった思い切りのよいスタートで主導権を奪い、心地よく加速して都井とのリレーゾーンにさしかかる。スムーズに都井にバトンが渡るが、ここで内側から京大のエース・藤澤が猛烈に差し込んでくる。都井も懸命に踏ん張るがバックストレート中央付近から一気に抜き出られ、ややリードを許し三走へ。ここで舩島

にバトンがうまく渡らず、都井が精一杯手を伸ばしてギリギリ繋ぐ格好となる。舩島も懸命に追うがなかなか差を縮められない。尻上がりに調子を上げるがそれでも差は埋まらずアンカー勝負に。春日もよく追い、京大の山田に継り付くも差すまでに至らず。結局42"71の2位でフィニッシュした。

4年生が抜け、純短系は中嶋、都井の1-2走間を失う。しかし他パートながら10秒台に突入した西田、伸び著しい増本、舩島など素材は豊富である。来年のリレーチームにも大いに期待したい。

12:25 男子 5000mW 決勝

早川(3年)、瀧川(1年)の出場。東大は持ちタイムでは京大を上回っており、ワンツーフィニッシュが期待された。天候は曇りであり、涼しい中でのレースとなった。

スタート直後、いきなり京大の永田がとび出し他の3人を引き離すが、その後スピードは落ちて800m付近で集団に吸収された。早川、京大の生谷、瀧川、京大の永田の順でレースは進む。しかし、1400m付近で永田が、1800m付近で瀧川が先頭から遅れると、早川と生谷の優勝争いとなった。2人は3000mを13'42"で通過。続いて瀧川が14'15"で、永田が15'01"で3000mを通過する。このときにはすでに先頭の2人と瀧川の差は100mほど、瀧川と永田の差は100m以上であった。優勝争いに動きが見られたのは3200m付近で、早川がスピードを上げ生谷が遅れ始め、その差は周を重ねるごとにどんどん広がっていく。4000mを過ぎても早川の勢いは止まらず、最終的には早川が他の選手に大きな差をつけ、22'54"52で優勝。瀧川は後半で粘りを見せるも前の生谷をとらえることはできず、24'10"77の3位であった。

早川は自己ベストを約40秒も更新しており、来年の関東インカレでの活躍が期待される。瀧川は2位でゴールできなかったことに悔しさが残るが、タイムはほぼ予定通りで、調子もまずまずであった。これからの冬季練習を乗り越え、来シーズンは大きく成長した姿を見せてほしい。

13:05 女子 400m 決勝

日下(4年)、丹家(1年)の出場。日下は800mとこの400mで戦前から京大の岩橋とのデットヒートが予想されていた。惜しくも800mで敗れてしまった後のこの400mではリベンジしての優勝が期待される。丹家は本来専門外の400mに出場するという事で、まずは完走を目標とし、そして京大の2番手にどれだけ迫れるかが見どころである。スタートして、まずは横一線、しかしやはり地力に差がある丹家は徐々にほかの3人との差が広がってしまう。日下は京大の2人と一進一退の攻防を見せる。第二コーナーを回った時点では、まだ勝負がわからない。しかし、250m以降徐々に差を広げ1'01"51の1位でゴール。最後の京大戦で有終の美を飾った。丹家は1'11"79の4位でゴール。厳しい結果となったが、確実に1点を獲得した。今後の飛躍が期待される。

13:10 男子 800m 決勝

須田(4年)、横田(4年)、渡邊(3年)の出場。3人は1週間前の記録会で自己ベストを更新しており今大会にも好調で臨む。持ちタイムでは渡邊が1位、須田が4位、横田が5位となっており、各々が勝つべき相手に勝ち合計得点で勝ち越したいところである。

スタートから横田は積極的にレースを引っ張り、渡邊と須田は集団で待機する。細かい順位の変動こそあったものの、横田を先頭に6人の集団のまま400mを57秒台で通過。2周目に入っても横田は前を譲らずレースを進める。600m過ぎから須田が勝負を仕掛け、京大勢と渡邊が追従する。このあたりから横田は動きが鈍くなってしまった。ホームストレートに入ったところで、ここまで力を溜めていた渡邊がスパートする。京大の1番手である大川をあっさり振り切り、1'58"21でゴールし優勝を決めた。須田は最後の100mで伸びず2'00"49の4位でゴール。横田は前半の疲れから京大の3番手に逆転を許し2'01"94の6位となり、合計得点では1点負けであった。

昨年の京大戦では苦い思いをした渡邊が実力通りの優勝を果たしたことは来年度の

更なる飛躍を予感させた。須田と横田は今後も競技を続ける可能性があり、今回の悔しさをバネに一層の精進を期待したい。

13:30 男子 200m 決勝

午前中は雨が降ったりやんだり忙しい天気ではあったが、午後からは少し落ち着いてきたなか200mがはじまる。3レーンに舩島(2年)、5レーンに増本(3年)、7レーンに春日(2年)と3名が出場。各人の持ちタイムを考えれば負け越しを喰らう苦しい状況ではあるが、本拠地である駒場のアドバンテージを活かすことができるかが見物である。号砲が轟き、選手たちが一斉に飛び出す。東大勢の出だしは好調で、京大勢を制している。舩島が先頭でカーブを抜けたところ、後ろから春日が、そしてその後ろから増本が次々に直線に入る。しかしまだ油断はできない、京大勢のスパートは勢いがある。これはまずいのではと思ったが、東大勢はそれを上回る勢いでスパートをかける。結局、京大勢が追い付くことはなく、東大勢が舩島、春日、増本の順でゴール。結果は追い風1.2mで、1位の舩島が22"75、2位の春日が22"89、3位の増本が22"92であった。ここまでの競技で東大は何とか勝ち越している。駒場の恩恵を受けてのことは分からないが、このままの調子でいけば東大は優勝できるだろう。

14:05 男子 400mH 決勝

1レーンに酒谷(3年)、3レーンに赤木(3年)、5レーンに高木(2年)の出場。午前中降っていた雨もあがり、まずまずのコンディションの中でのレースとなった。号砲と共に飛び出したのは高木。前半からキレのある動きで飛ばす。酒谷も110mHの疲れを感じさせない勢いのあるスタートを見せる。一方、赤木はスタートは抑え目にいき、様子をうかがう構え。赤木は後半型であるので、後半の伸びに期待できる。高木はスタートの勢いそのままにバックストレートでも素晴らしい走りを見せる。バックストレートを抜けたあたりで既に高木が集団から一人飛び出している状態。そこからホームストレートに入っても高木のペースは全く乱れずリードを維持し続ける。このまま

高木が1着フィニッシュかと思われた。だが、ゴールまであと50mというところで赤木が驚異的な伸びを見せる。このラストスパートにより赤木が56"01の1位、高木が56"05の2位でフィニッシュした。酒谷も赤木同様、ホームストレートで追い上げを見せる。前を走る京大の選手に追いつくかと思われた。だが、やはり110mHでの疲れが出たか。猛追も一歩及ばなかった。0"07差で敗れ、56"58の4位でフィニッシュした。これにより東京大学に14得点、京都大学に7得点となった。惜しくもスコンクできなかったものの、京大に点差をつけることができ、非常に良いレースとなった。

14:20 女子3000m 決勝

杉浦(1年)、立岡(1年)の出場。持ちタイムの上では京大勢二人に大きく負けているが、京大岩橋は800m、400mとつづき3レース目でもあるので、全体がスローとなることが予想される。後半のペース変化にいかに対応できるかが勝負を分かつものとなりそうだ。

号砲が鳴る。スタートから予想通りのスローペース。持ち記録が一番悪い立岡が引張る形となりレースが進む。1000mを過ぎても依然集団は動かず、動きがあったのは2000mを過ぎてからであった。京大2番手の森山が前に出て、そのすぐ横に岩橋がつける。立岡は対応できず離されてしまう。そのまま2400mを通過。2000mからの一周が前の週より19秒も上がる形となった。杉浦も前の二人としだいに差をつけられ離れていく。ラスト200mでは20mほど離れてしまい、このまま終わってしまうのかと思われたが、杉浦が決死のスパートで前にじりじり詰め寄り、ラスト10mで1人をおかわすという劇的なレースを見せた。杉浦は11'42"62の2位でゴール。ゴール後に倒れこんで立ち上がれなかった。立岡はペース変化についていけず、12'19"82の4位でゴール。

杉浦は下馬評を覆す素晴らしい走りをした。立岡も普段と違うレースを経験することができた。二人ともまだ1年生なのでいろいろなレースを経験して、冬を越えて一

皮むけて、来年以降の活躍も期待したい。

14:40 男子5000m 決勝

山田健(4年)、宮野(2年)、山田竜(2年)の出場。当初は宮野、東と、最近不調の山田竜にかわり調子をあげてきた山田健がエントリーしていたが、東が新型インフルエンザのため出場できなくなったので、山田竜がかわって出場した。天候は午前降っていた雨が上がりコースも乾いていて、走るにはベストなコンディションの中でのレースとなった。

スタート直後宮野が先頭にでるもその後ろには京大の小山がつく。1000mを過ぎたあたりから先頭の2人から残り4人が離れ始め、2000mでは10秒近い差となる。宮野は小山に抜かれたあとも粘り強くついていったが、2400mあたりから離されてしまう。結局そのまま小山は実力を見せつけ、そのまま14'53"95の1位でフィニッシュし、宮野もなんとか粘り15'16"29の2位でゴールした。第2集団は順位の変動がないまま、まとまって走っていたが、3000mで山田竜が前にとび出し、さらに4000mですっと一番後ろを走っていた山田健が山田竜の前に出てロングスパートをかける。山田竜は一時京大の2人に追いつかれるも、ラスト一周で引き離し、さらに山田健を抜き返してゴール。山田竜が15'25"33で3位、山田健が15'26"03で4位だった。

新型インフルエンザなどの影響でベストメンバーではなかったものの、宮野の粘り、山田竜のラストスパート、山田健の冷静な走りによって、この種目東大は3点勝ち越すことができ、男子の部優勝に貢献することができた。また、急なメンバー変更でも結果を残せる層の厚さも示せ、2週間後の箱根駅伝予選会にも期待が持てる試合でもあった。

15:05 女子4×100mR 決勝

エースの清水(4年)が体調不良で本大会への出場を断念したものの、午前中に行われた女子100m競争では1年生2人が奮闘し、勝ち越しに成功した。天候も回復してきた頃、この勢いに乗って勝利したい女子4×100mリレーは、鈴木(1年)-久保木(1

年)-高山(3年)-日下(4年)の順で、5レーンに出場。

まず号砲がなると、脚の痛みを押して出場する鈴木が好走。京大の選手にややリードしてバトンゾーンへ。久保木のダッシュも素晴らしく、スムーズにバトンが渡ったかと思われたが、なぜかバトンがなかなか渡らない。ゾーンを過ぎたかというあたりで、久保木が激しく減速してなんとかバトンを渡したが、この時点で京大には大きな差をつけられた。その後、高山と日下は必死に京大の選手を追いかけてゴールしたが、レース後には最初のバトンゾーンの監察員が黄色い旗を上げており、オーバーゾーンによる失格であった。

何が起るかわからないと言われる四継のバトンで失敗し、結果は残念なものとはなったが、失格を覚悟しても全力で走り切ったメンバーの走りは感動的のものであった。まだまだ可能性を感じさせるチームに、来シーズンも期待したい。

15:15 男子4×400mR 決勝

総合得点で東大がリードする中、男子4×400mRは行われた。東大は5レーンに大澤(1年)-増本(3年)-赤木(3年)-定金(3年)の順で出場。

スタートの号砲。大澤は快調なスタートを切り、少しずつ京大の選手を離していった。京大の一走もなかなか譲らず、少し大澤がリードした状態で、バトンは二走へ。二走は増本。昼に行われた200mでまずまずの走りだった増本は初めから飛ばしていった。オープンになるところでの京大の追い上げが心配されたが、増本はそれを寄せ付けなかった。ホームストレートで京大が迫ってきたが、それもかわして3走赤木へ。序盤から徐々にスピードを上げ京大を突き放したい東大だが、京大も負けじと追って来た。ホームストレートに入ると京大が赤木を追い抜いてしまった。赤木も離されまいと粘ったが、京大のリードで4走定金へ。何としても4×400mRは勝ちたい京大と、勝って締めくりたい東大がぶつかった。定金は序盤から飛ばして京大を追い上げていった。京大もなかなか譲らない。ほぼ並ぶよ

うにしてホームストレートへ。ここで定金が前へ出た。このまま東大が勝つかと思われたが、最後の最後に京大の逆転を許してしまった。東大は3'23"16の2位に終わった。

4×400mRは結果として負けてしまったが、レース内容は目を見張るものがあった。この冬で更に力を付け、来年の試合で良い結果を残したい。

フィールド

10:15 男子棒高跳 決勝

荒井(4年)、原(3年)、土居(2年)の出場。前半は雨が降ったり止んだりを繰り返し、向かい風の強い厳しい条件での試合となった。

荒井は棒高跳を専門としないため、2m00からのスタート。跳躍に不安のある土居も記録無しを防ぐためにこの高さを跳ぶ。二人とも危なげなくこれをクリア。荒井は専門とする走高跳の対校選手であったため、ここで競技を終えた。原は3m00からのスタート。他種目との兼ね合いのため、十分に足合わせができておらず、ピットに来てすぐの公式練習では助走が合わないなど、不安な立ち上がりではあったが、3m00を余裕のクリア、一気に3m40までバーを上げると、ごこちない空中動作ながらこれもクリア。続く3m60は越えられなかったが、時間が無い中できっちりと自分の仕事をこなした。土居は3m70から再び跳躍を始める。1跳目は突っ込みが遅れてしまい失敗、2、3跳目は目立った失敗は無かったものの、向かい風に気を取られ、全体的に精彩を欠いた空中動作でバーを落とし、試技を終えた。京大の三番手小西がこれを跳び、残り二人もさらに上の高さをクリアしたため、スコルク負けが決定した。原が3m40の4位、土居、荒井が2m00で5位であった。

惜しい結果であったが、京大戦のみの反省に終わることなく、来シーズンの対校戦へ向けて根本からの実力アップを図りたい。また、3つの対校枠を、急造でなくある程度の力のある選手で埋められる層の厚さが求められるだろう。課題が浮き彫りとなった試合であった。

10:15 男子ハンマー投 決勝

寺島(4年)、千葉(3年)、今村(1年)の出場。試合開始頃から雨が降り始め、競技のしにくい環境であった。当初出場が予定されていた1年の佐々木は試合前に膝を痛めてしまったが、練習では42m近く飛ばしている寺島に得点の期待がかかる。

千葉は肘を痛めていたため、練習も十分できずに臨んだが、1投目で31m51を投げる。落ち着いて投げた2投目では31m98と記録を伸ばし、3投目はファールとなり、やり投げに体力温存するために4、5、6投目は棄権し、結果31m98で4位で終えた。佐々木の補欠で入った今村は1、2投目をファールするが3投目で13m64を投げる。七大戦の自己記録を超えたいところだが、13m台にとどまり記録は6投目の13m82で6位。寺島は1投目から39m89を投げるが、2投目以降で越えられず、記録39m89で京大の1番手と数cm差の1位であった。

準備や雨、メジャーが切れる事故で時間のかかる試合であり、選手全員が良い調子ではなかったが、運が味方し、1点負けで終えることができた。来年は寺島が抜けてしまうので、千葉、1年の成長が期待される。

11:15 男子走幅跳 決勝

廣瀬(4年)、浅沼(4年)、西田(3年)の出場。小雨の中、各選手とも丹念に足合わせを行う。しかし競技が開始する頃には、一転、強烈な日差しに襲われる。急激なコンディションの変化に上手く対応することが出来るか。

廣瀬は攻めの跳躍を見せる。最初の3跳を全てファールで折り返すが、その後は少しずつタイミングを合わせ、6跳目で6m44を記録。2位を獲得する。浅沼も半数の跳躍がファールとなる苦しい展開。好調の走力を生かしきることが出来ず、5m99で6位。西田は先に行われた100m対校で見せた圧倒的な走力で、力強い跳躍を連発する。助走路に水溜まりの残る悪コンディションの中、自己ベストに近いパフォーマンスを見せ6m77の1位で競技を終える。

以上により、この種目での東大の得点は12点、辛くも勝ち越しであった。しかしこ

の対校戦を境に廣瀬、浅沼が抜けることで、来期の戦力の大幅ダウンと苦しい戦いが予想される。この冬は西田新パートナーの下、徹底的な鍛練を積み、後続の育成に励んで欲しい。

11:15 女子走幅跳 決勝

大久保(4年)、高山(3年)の出場。朝から降り続けていた雨が徐々に弱まるも、変わりやすい追い風が強く吹く中で競技が開始された。両者共に自己記録を出せばこの種目では得点的に勝ち越す可能性があり、集中して記録を狙ってゆくことが期待された。

大久保は久しぶりの試合であったが、持ち前のリズム感を生かした助走でうまく踏切り、1跳目に4m37を飛ばす。その後も記録を伸ばそうと試行錯誤をしたが、力んでしまい記録を伸ばすことは出来ず、4m37で4位に終わった。高山は1跳目に大学ベストとなる5m06を飛び、京大の富田に先行する。その後、ファールながら5m20を越す跳躍を見せるなどしたが、踏切板にうまく合わせる事が出来ず、最初に出した記録で逃げ切る形となり、5m06で1位であった。

この種目で東大は得点的には京大と引き分けとなり、残りの種目へ希望をつないだ。

11:30 男子円盤投 決勝

原(3年)、佐々木(1年)、片山(1年)の出場。ハンマー投の時土砂降りであった天気が回復し始め、サークルも試技の間に乾くほどになった。佐々木は実力を発揮すれば十分に1位を狙える位置にいたので、順位だけでなく更なる自己ベストの更新も期待された。原、片山は円盤投全体での点数の勝ち越しを狙うために、相手の3番手を超える記録を出すことが求められた。

佐々木は1投目に32m32を投げ、1投目からトップに立った。その後3投目に34m69と記録を伸ばし、5投目には36m98の大投擲を見せ、1位を確実なものとするのと同時に、関東インカレA標準も突破した。原はこの日5種目の競技に出場し、円盤投の前にも400mに出場していたので3投目からの参加となった。しかし疲れからか、思

うような投擲ができず5投目までがファウルとなってしまう、6投目は16m29と記録を残したが6位で試技を終えた。片山は2投目に29m35とまずまずの記録を残したが、練習通りの投擲ができているとは言えなかった。その後5投目に29m50の自己ベストは投げたが、結局京大の3番手に追いつくことはできず、5位となってしまった。

佐々木はこのまま順調に成長し、ゆくゆくは全力レの標準を突破することが期待される。2番手、3番手となる選手もこれに負けじと精進を重ねてもらいたい。

13:00 男子走高跳 決勝

荒井(4年)、地子(4年)、坂本(3年)の出場。競技開始時には止んでいた雨も、中盤から再び降り出し、雨の中での試合となった。

地子はここ最近の練習不足を感じさせない好調の様子を見せ、自己ベストである1m65まで1跳目で成功させた。続く1m70は1跳目を失敗したものの、2跳目で成功し自己ベストを更新した。1m75はうまくバーを越えられず失敗に終わった。荒井もこれまでにない良い跳躍を見せ、自己ベストを超える1m70まで1跳目で成功させた。1m75は1跳目、2跳目を惜しくも失敗。続く3跳目で成功し、1m80に挑戦する。ここでも良い跳躍を見せ成功への期待が高まるが、残念ながらクリアはならなかった。これまで記録を徐々に伸ばしてきたものの、対校選手として活躍するには至らなかった荒井であるが、引退試合で自己ベストを10cmも更新し有終の美を飾った。坂本は1m70から競技を開始。この高さを、1跳目は失敗するものの、2跳目で成功。1m75も1跳目で成功し、1m80へ進む。1m80は1跳目、2跳目を失敗し、京大選手の1位2位独占という不安が過る。しかし、これを3跳目で成功。続く1m85を2跳目で成功させ、優勝を決めた。

結果、地子が1m70で5位、荒井が1m75で4位、坂本が1m85で1位、合計11点を獲得した。この試合で全員が自己ベストを更新し、得点でも京大に勝越せたという点で、非常に良い結果であった。一人一人の

成長は見られるものの、選手層の薄さは依然として問題である。今後荒井が抜け、対校戦の3枠目を埋める専門の選手が不在になってしまうので、新たな人材の育成に期待したい。

13:30 男子砲丸投 決勝

寺島(4年)、原(3年)、佐々木(1年)の出場。暫く止んでいた雨が狙いすましたかの如く再び降り始める中、競技開始となった。

寺島は午前中にあったハンマー投の疲労を微塵も見せず、6投すべてを9m台となる抜群の安定感を見せた。5投目には自己ベストとなる9m70を投げ、5位であった。原は1投目こそ失投だったものの、それ以降は順調に記録をのばし、5投目に9m52をマークした。あと一息記録の更新を期待された6投目はファールとなり、6位であった。佐々木は1投目に10m21の記録を残した後4投連続ファールという安定感皆無の投擲で周りをひやひやさせたが、チームメイトやOBの力を借り、なんとか最終6投目に10m75をマーク、京都大学の上位独占を阻止し3位となった。

この試合において、東大投擲パートは、層の厚い京大投擲パートに対し善戦したと言えるが、砲丸投に関しては本来の力の差が大きすぎたようである。今後、下級生に一層の奮起を期待したい。

13:30 女子砲丸投 決勝

楠木(4年)、高山(3年)の出場。雨が時折激しく降る中での試合となった。全出場者の中で最も良い記録をもつ楠木は順当に1位をとること、跳躍選手でありながら起用された高山は、その筋力とバネを活かして京大の2番手に確実に勝つことが期待された。

楠木は1投目から8m台を投げ、他種目の疲労からか7m前後にくすぶる京大の富田を寄せ付けなかった。そのまま順調に投擲を続け、6投目の記録8m36で1位であった。高山は1投目から6m台後半を投げるが、京大の2番手にわずかに及ばない。しかし、その後調子の上がない京大選手を尻目に着実に記録を伸ばしていった。ステッ

プをつけるかつかないかサークルに入ってから悩むというマイペースさも見せながら、5投目の記録6m99で3位となった。女子チーム唯一の投擲専門選手であった楠木もこの試合で引退となってしまった。残る選手は、自分の種目をきちんとこなすことが第一だが、対校戦において無視できない投擲種目にも果敢に挑戦して欲しい。

14:00 男子三段跳 決勝

廣瀬(4年)、定金(3年)、西田(3年)の出場。朝から天候が思わしくなく、助走路に水たまりができていたが、この競技が始まる頃は、雨は止んでいた。

定刻通りに試合が始まったが、コンディションが良くなかったこともあり、出場選手3人とも思うようなジャンプができない。そのなかでも、今期大きくベストを更新した定金は14mを超えるジャンプを見せる。廣瀬は七大戦後からの良くない流れを止めることができず、14mには届かなかった。他の種目にも出場していた西田は、疲れが心配されたが、自己ベスト近くの記録を確実に残せていた。結局、定金が14m07で優勝を収め、西田が13m72で2位、廣瀬は13m62で4位に終わった。

引退試合で廣瀬が実力を発揮できなかったのは、本人にとっても、他の部員たちにとっても残念だった。来シーズンの対校戦に向けて、彼や他の偉大な先輩方の活躍を見てきた現役生の成長が期待される。

14:15 男子やり投 決勝

谷(4年)、千葉(3年)、原(3年)の出場。朝から降り続いた雨で地面が滑りやすい中で行われた。谷も千葉も怪我の為本調子ではないが、手強い京大に対抗するため無理を押しでの出場となった。谷は足を痛めていたため、あまり練習ができないまま本番を迎えることとなった。結果は4回ファールするも、57m48の記録を残し他の追隨を許さない形で1位となった。千葉も怪我が完治しておらず、練習もほとんどできないまま出場することになった。怪我が気になるせいか本来の投擲はできておらず、結果は44m91で5位であった。他にも多くの種目に出場していた原は、全力を出し切れる

かが課題であった。結果は40m17で6位であった。

谷はベストには到底及ばないものの1位を取り有終の美を飾ることができた。しかし、東大全体としては選手層の薄さを感じさせる大会であった。今後は怪我しないように注意し、十分な練習を積んだ上で試合に臨んでくれることを期待する。

1.5 試合結果

第82回東京大学 京都大学対校陸上競技大会

第8回東京大学 京都大学対校女子陸上競技大会

於 駒場グラウンド (H21.10.3)

男子 100m 決勝 (+2.0)

1	西田昂広	東京大	10"95
2	眞武俊輔	京都大	11"00
3	春日慶輝	東京大	11"14
4	藤澤健斗	京都大	11"21
5	都井紘	東京大	11"29
6	久保慶護	京都大	11"46

男子 200m 決勝 (+1.2)

1	拙島一樹	東京大	22"75
2	春日慶輝	東京大	22"89
3	増本健太郎	東京大	22"92
4	萩生翔太	京都大	23"14
5	山田諒	京都大	23"29
6	久保慶護	京都大	23"62

男子 400m 決勝

1	拙島一樹	東京大	49"47
2	大沢涉	東京大	50"77
3	山瀬康平	京都大	51"86
4	原湖楠	東京大	52"82
5	堀田孝之	京都大	52"95
6	萩生翔太	京都大	56"16

男子 800m 決勝

1	渡邊拓也	東京大	1'58"21
2	大川亮	京都大	1'58"91
3	水元惟暁	京都大	1'59"85

4	<u>須田遊人</u>	東京大	2'00"49
5	<u>宿利隆司</u>	京都大	2'01"13
6	<u>横田祥</u>	東京大	2'01"94

男子1500m決勝

1	<u>小山裕之</u>	京都大	4'01"37
2	<u>小山俊之</u>	京都大	4'01"47
3	<u>山田竜也</u>	東京大	4'06"90
4	<u>竹内真裕</u>	東京大	4'10"55
5	<u>坂本剛</u>	京都大	4'11"24
6	<u>石川恭平</u>	東京大	4'20"62

男子5000m決勝

1	<u>小山俊之</u>	京都大	14'53"95
2	<u>宮野健司</u>	東京大	15'16"29
3	<u>山田竜也</u>	東京大	15'25"33
4	<u>山田健太郎</u>	東京大	15'26"03
5	<u>山田唯</u>	京都大	15'28"11
6	<u>櫻井研吾</u>	京都大	15'30"67

男子110mH決勝(+0.6)

1	<u>酒谷彰一</u>	東京大	15"33
2	<u>増本健太郎</u>	東京大	15"61
3	<u>江間輝裕</u>	東京大	16"12
4	<u>前田靖朝</u>	京都大	16"46
5	<u>大橋正義</u>	京都大	16"50
6	<u>清水宏幸</u>	京都大	17"37

男子400mH決勝

1	<u>赤木裕</u>	東京大	56"01
2	<u>高木海平</u>	東京大	56"05
3	<u>大橋正義</u>	京都大	56"51
4	<u>酒谷彰一</u>	東京大	56"58
5	<u>清水宏幸</u>	京都大	1'00"03
6	<u>岡本京祐</u>	京都大	1'00"42

男子5000mW決勝

1	<u>早川晃司</u>	東京大	22'54"52
2	<u>生谷隆馬</u>	京都大	23'43"74
3	<u>瀧川朗</u>	東京大	24'10"77
4	<u>永田和寛</u>	京都大	26'02"43

男子4×100mR決勝

1	京都大	42"53
2	東京大	42"71
(中嶋-都井-舩島-春日)		

男子4×400mR決勝

1	京都大	3'22"85
2	東京大	3'23"16
(大沢-増本-赤木-定金)		

男子走幅跳決勝

1	<u>西田昂広</u>	東京大	6m77(+1.4)
2	<u>田中伸弥</u>	京都大	6m47(+1.4)
3	<u>廣瀬彬</u>	東京大	6m44(+1.6)
4	<u>秋元一志</u>	京都大	6m38(±0.0)
5	<u>谷口康晴</u>	京都大	6m36(+0.8)
6	<u>浅沼達也</u>	東京大	5m99(+2.6)

男子三段跳決勝

1	<u>定金駿介</u>	東京大	14m07(+2.9)
2	<u>西田昂広</u>	東京大	13m72(+0.0)
3	<u>廣瀬彬</u>	東京大	13m62(+0.6)
4	<u>田中伸弥</u>	京都大	13m44(+0.6)
5	<u>秋山源</u>	京都大	13m23(+2.1)
6	<u>飯村大智</u>	京都大	12m80(+0.4)

男子走高跳決勝

1	<u>坂本智</u>	東京大	1m85
2	<u>松室堯之</u>	京都大	1m80
3	<u>巳波壮馬</u>	京都大	1m80
4	<u>荒井博貴</u>	東京大	1m75
5	<u>地子智浩</u>	東京大	1m70
6	<u>皆川広太</u>	京都大	1m70

男子棒高跳決勝

1	<u>秋元一志</u>	京都大	4m50
2	<u>田中皓介</u>	京都大	4m40
3	<u>小西康晴</u>	京都大	3m70
4	<u>原湖楠</u>	東京大	3m40
5	<u>土居富裕</u>	東京大	2m00
5	<u>荒井博貴</u>	東京大	2m00

男子砲丸投決勝

1	<u>嶋田研志郎</u>	京都大	10m81
---	--------------	-----	-------

2	矢川勝太	京都大	10m77
3	佐々木駿	東京大	10m75
4	佐藤慎祐	京都大	10m36
5	寺島孝明	東京大	9m70
6	原湖楠	東京大	9m52

男子ハンマー投決勝

1	寺島孝明	東京大	39m89
2	久下哲寛	京都大	39m68
3	佐藤慎祐	京都大	35m51
4	千葉伸宏	東京大	31m98
5	矢川勝太	京都大	27m22
6	今村昌平	東京大	13m82

男子円盤投決勝

1	佐々木駿	東京大	36m98
2	矢川勝太	京都大	31m03
3	佐藤慎祐	京都大	30m96
4	林翔太	京都大	29m92
5	片山卓也	東京大	29m50
6	原湖楠	東京大	16m29

男子やり投決勝

1	谷彰一郎	東京大	57m48
2	佐藤慎祐	京都大	50m16
3	林翔太	京都大	50m09
4	川島龍樹	京都大	45m54
5	千葉伸宏	東京大	44m91
6	原湖楠	東京大	40m17

男子トラック順位

1	東京大	110
2	京都大	84

男子フィールド順位

1	京都大	90
2	東京大	78

男子総合順位

1	東京大	188
2	京都大	174

女子100m 決勝 (+1.0)

1	久保木結	東京大	13"15
2	富田夏希	京都大	13"31
3	鈴木理香	東京大	13"41
4	廣瀬亜由美	京都大	14"11

女子400m 決勝

1	日下桃子	東京大	1'01"51
2	加奈山憲代	京都大	1'02"26
3	岩橋優	京都大	1'02"89
4	丹家里枝	東京大	1'11"79

女子800m 決勝

1	岩橋優	京都大	2'20"39
2	日下桃子	東京大	2'22"80
3	浜松由莉	東京大	2'31"65
4	福谷彩織	京都大	2'32"90

女子3000m 決勝

1	岩橋優	京都大	11'39"77
2	杉浦奈美	東京大	11'42"62
3	森山友紀子	京都大	11'42"84
4	立岡美夏子	東京大	12'19"82

女子4 × 100mR 決勝

1	京都大	52"11
2	東京大	DSQ(オーバーゾーン) (鈴木-久保木-高山-日下)

女子走幅跳決勝

1	高山花子	東京大	5m06(+2.0)
2	富田夏希	京都大	4m97(+1.8)
3	加奈山憲代	京都大	4m50(+1.8)
4	大久保渥子	東京大	4m37(+1.6)

女子砲丸投決勝

1	楠木千尋	東京大	8m36
2	富田夏希	京都大	7m14
3	高山花子	京都大	6m99
4	廣瀬亜由美	京都大	6m65

女子トラック順位

1	京都大	24
2	東京大	20

女子フィールド順位		
1	東京大	11
2	京都大	9

1	東京大	11
2	京都大	9

女子総合順位		
1	京都大	33
2	東京大	31

1	京都大	33
2	東京大	31

2 箱根駅伝予選会

2.1 監督の言葉

監督 寺田秋夫

第 86 回箱根駅伝の予選会は、立川昭和記念公園敷設コースで行われました。今春の本戦でのアクシデント等で、強豪校・近年の優勝経験校が多数予選会出場に回り、スタート時に気温 17 度、曇天と絶好のコンディションでもあり、記録レベルが上がるのが予感されました。本学は、学部チームは昨年の上位 10 名からは 1 名抜けただけの体制で臨んだ年であり 10 時間台を視野に入れ、大学院チームは院チーム記録の更新と依田 (D2) の選抜チーム入りが目標となる試合でした。学部チームは 3 週間前が疲労のピークで本番までに纏め上がるか心配でしたが、アップを見る限りでは各選手緊張はあるものの動きもやわらかく、期待が持てるムードの中スタートを迎えました。

スタートは出場校から考えてハイペースとなるかと考えましたが、強豪校にすれば各種駅伝の過密スケジュールの中で迎えているこのレースで確実に通らなければならないという事情もあったのでしょう、入りは 3 分/km 丁度位のゆったりとしたペースで入り、5km も 100 人以上の大集団で 14'50 をやや切る程度のよいペースで進みます。この中に院生の増田・依田は入り、学部の東・宮野 (共に 2 年) も次の中堅校の集団に入り好調に走っていきます。続いて院生北川、京大戦で 1 度ピークを作り調整状況が不安だった、竜也 (2 年)・健太郎 (4 年) の山田コンビも、ほぼ並んで快調に通過し、学部は 10 番手までは 16 分台で通過します。

何度、来ても次に応援する場所を迷うこのコースですが、今年はコンディションも良いので、中盤からしっかり気分を入れ直させたいところですので市街地から再度公園に入る 11km 過ぎに回ります。ここも先頭は大集団で来るのかと考えていたところ、上

位校が思いのほかばらけて、農大、東海大・駒沢・日体大あたりが集団でくるものの、その後はチームで走れている学校は少なく順大・国学院・神奈川大勢が来る中を依田がまだまだ余裕ある走りで通過、続いて、増田・宮野・東と 63 分程度のペースで通過し、ここで後続が途切れるかと覚悟したところを院生北川、石原 (M2)、学部両山田、高田 (2 年)、故障上がりの青木 (2 年)、大久保 (1 年)、山崎 (4 年) とほぼ視界に入る間隔で次々に来て、学部の 10 番手が 69 分程度のペースで通過し、対校順位が気になっていた防大・慶応・立教にはここで勝負をつけた格好になります。後続の院生も、順位的には下位ではありませんでしたが、周囲の選手よりはかなり体が動いて通過し、後半での順位アップを期待しつつ残り 3km ポイントに行くと、依田が苦しそうな表情ながら 100 番前後で予選落ちしそうな大学の中では 8 番目で通過します。その後は開いてしまいましたが、平成国大・創価大の中堅にのって宮野が通過し、程なく東・増田が通過し、石原、両山田と 11km ポイントよりは順位を上げながら続いて行き、学部・院生とも概ね順位を上げながら通過しました。

結局、依田は 61'34 の 105 位 (予選落ち各校の 1 番手選手としては 11 番、同総合順位で 24 番) と、今回も選抜チーム候補選手には招聘される期待が高い順位となりました。また、宮野・東がインカレハーフマラソンの標準を切ったの 200 位中盤と上位も健闘しましたが、1 年の大久保・渡邊俊も後半よく踏ん張ったことも効いて、総合タイムは 11 時間 11 分 37 秒と、昨年より 3 分近く伸ばしての 26 位でした。好コンディションでしたので、タイムは割り引くべきではありませんが、順位の方は、昨年悪すぎた国際武道と、強化し始めた武蔵野学院大に抜かれはしたものの、11 時間台で走る大学の中では一歩抜き出した格好です。今年のメンバー構成を考えると、来年こそは 10 時間台を狙える自信と足がかりになり、また、大学経営として強化している大学にも隙があれば十分に伍していける自信も持てた結果でした。院生も 11 時間 31 分 16 秒の 34 位で院生チームの歴代 2 番目の結果となり、これも 4 月当時の状況から、初心者 of 戦力化や留学生の勧誘など、「先ずは出る」ところからの頑張りでここまで来たのは立派です。学部は 10 時間を達成すべき目標として語れるところまできましたので、また 1 年、志を高く取り組んでほしいと思います。また、院生は研究活動で大変な中で出続けることは立派ですし、理系生は院に進級は当然となりつつあるので、学部生の内から長期的な

視野で取り組んでいけると良いと感じます。

さて、4年間OB・OGの皆様にも、学生選手諸君にもお世話になりましたが、今回で監督の職は退かせていただきます。新監督の藤田さんは、競技は厳しくやりつつも、それこそが楽しみだと、みせてくれる選手でもあるので、本当に強い東大復活に向けて活躍してくれると思います。4年間のご声援、ご指導ご鞭撻ありがとうございます。今後とも東大陸上運動部への変わらぬご声援をお願い申し上げます。

2.2 長距離チーフの言葉

長距離チーフ 山崎貴裕

去年、今年の予選会の目標として東大記録更新を掲げました。冬のハーフでは上位10名の平均タイムが70'21で20kmに換算して合計すると11時間6分53秒となり、新一年生やこれからの伸び次第では十分に狙える位置にいると思っていました。しかし、ハーフで関カレ標準を切った山田(4年)の怪我や竹俣(3年)の精神的な落ち込みなどの不安要素があり、東大記録更新は厳しくなっていました。北海道合宿では山田(4年)が順調に走っていたり、竹俣(3年)が復帰したり、潰瘍を患っていた野村(4年)などが体力を取り戻し、東大記録はまだ狙える位置にいると思っていましたが、河口湖合宿を超えてケガ人が続出し、選考に絡むような人が怪我をしてしまい、9月に行われた予選会最終選考では中位から下位の人のタイムが芳しくなく予選会に対して不安を感じずにはいられなくなっていました。明らかに東大記録は狙えない状態だったので、目標を下げることも考えましたが、目標変更に伴うチームとしての勢いが消えるのが心配だったので、日々の集合では一人一人が最後まであきらめず全力を尽くすことを目標に言ってきました。京大戦まで中下位層の選手の走りにキレがなく不安でしたが、そこからの調整期で調子を取り戻してくれ、チームに勢いが戻ってきたように感じました。内定していた野村(4年)は内臓の病気が悪化しなかなか復調せず、中島(3年)への選手変更を行うにいたりしました。今年で最後の四年生を選手から外れるということがより一層チームのために走るという意識を高めてくれたかもしれません。結果は11時間11分37秒で26位と去年より一つ順位を落とし、東大記録にはほど遠いものになってしまいましたが、宮野(2年)、東(2年)が関カレ標準を突破し一年生の大久保(1年)、渡邊(1年)も十分な走りをしてくれ来年への期待が膨らみます。出場した3年

生は下位3人と次の最高学年としてはさみしい結果になっているので、今回の予選会で得たものを生かして来年の予選会につなげてほしいと思います。今年は4年生が2人しか走っておらず、来年の予選会はまだ上を目指せると思います。今年のチームは怪我に悩まされ続けたので、来年は怪我とは無縁のチームになってほしいと思います。今の長距離パートはチーフが引っ張るまでもなく、各自が強い意志を持っていると思うので新チーフ竹俣にはあまり張りつめずに楽しくやってほしいと思います。当日は清里町の皆様も応援に駆けつけてくださいました。これからもこのような良い関係を続けてほしいと思います。1年間チーフをやらせていただき、とても楽しかったです。ありがとうございました。

2.3 大学院駅伝主将の言葉

大学院駅伝主将 月崎竜童

[院生チームの新時代]

今年度、大学院チームの駅伝主将を務めさせて頂いた月崎竜童(修士2年、航空宇宙工学専攻)です。今年の大学院チームの結果は11時間31分16秒(34位)でした。昨年は11時間18分36秒(25位)でしたので、結果としては大きく落としてしまいました。

私自身が今年の自己ベスト67分00秒から自己ワースト72分08秒と大きく落としてしまい、責任の半分以上を負っています。学部時代と違い予選会だけに照準を絞り自由に練習に打ち込めた修士1年。かえって今年は、修士論文に向け研究が本格化し、初めての国際学会で慣れない異文化の中、競技に専念できなくなったのも事実です。このような時間がない中で真っ先に削られるのは、ウォーミングアップ・クーリングダウン・補強などケアに対する時間でした。私自身9月にケガをしてインフルエンザの濃厚接触者として自宅待機する中、精神的ゆとりもなくなりました。また学部時代の同期が社会人として活躍する中、親のすねをかじりながら競技を続ける負い目も感じます。院生としての本分は研究である以上、研究室からのプレッシャーもあります。院生として競技者を続ける楽しさも難しさも味わった2年間でした。

しかしながら、個人をみれば博士2年の依田が61分34秒(105位)と学連選抜出場に大きく希望を残しました。昨年は学連選抜に選ばれながら補欠に甘んじ、この1年間努力を継続してきたのは、同じ院生として敬服に値します。また依田のみならず今年の

院生チームは各人が努力を積み、新たな歴史を刻めたように思います。

半年ほど前に私が「再び箱根への道」で宣言した目標は、わずかに一行でした。

「何とか10名揃えて出場します！」

昨年新チームが発足した時点で、残ったメンバーは7名。さらに学部からは1人も標準突破者が進学しない状況で、出場要件である10名すら揃えられない状況でした。学連選抜に依田を2年連続送り込むためにも、また初出場以来5年連続して出場している歴史を踏まえても、相当な危機感がありました。今回、院生チームが出場にこぎつけられたのは、2つの要因が挙げられます。

・大学時代、一度も5000m17分を切れなかった、松本・金尾(東大出身)がM1で自己記録を更新し、見事17分を切れたこと。

学部時代、一度も走る機会に恵まれなかった金尾・松本が、院生になって自己記録を更新し出場できたことこそ、院生チーム設立の本願であり、4年間彼らの日の当らない努力を見てきた我々としても、自分のことのように嬉しいものでした。

・東大の全キャンパスに声を掛け、他大学出身者が多数入部してきてくれたこと。

今年のチームはスイスからの留学生クリスを含め2カ国9大学の出身者から構成されています。

東京大学・東京学芸大学・中央大学・早稲田大学・東京工業大学・チューリッヒ工科大学・大阪大学・千葉大学・名古屋大学

所属するキャンパスも、本郷、駒場、柏キャンパスはもとより、三鷹の国立天文台、相模原の宇宙科学研究本部、中野の海洋研究所、神保町の国立情報学研究所、田無の東大農場と多岐に渡ります。(OBの皆さまでも初めて聞く研究所があるのではないのでしょうか?)

ゆえに選手全員が集まることは予選会まで一度もありません。博士3年のクリスに至っては予選会前日にアメリカ合衆国ロスアラモス研究所より帰国し、

3日後にマサチューセッツ州のMITで学会発表する強行軍です。従って練習は各人の練習環境に合わせて行われます。練習内容も自由度が大きい反面、孤独な場合も多々あります。このような実状から今年からweb上で練習日誌をつけ、情報を共有するなどの工夫も始め、チーム意識を高めて参りました。7月には千葉大学出身で大学院から競技を始めた修士1年の宮城が標準を突破し、10名が揃いました。9月には標準突破者が16名となり選考会を行うまでに至りました。

最早院生チームは、東大の学部出身者だけのものではありません。東京大学大学院は日本最大の大学院組織であり、その学生数は学部を上回ります。今年の院生チームは東大出身者がベースとなり、そこに志を共にする世界中の大学出身者が集まったチームとなりました。このようなチームで走ることができて、1年間の主将としてのマネジメントが報われる思いでした。

最後にはなりますが、学部生には院生の学連登録手続きから、エントリー手続き、代表者会議、サポート・応援に至るまで、忙殺されている院生の分までフォローしてくれました。院生がいくら多様化しても、やはり学部あつての院生チームです。石川、山崎、川口、丸山君を始め学部生の皆さん、マネージャーの皆さん、ご迷惑をお掛けしました。本当にありがとうございました。

OBの皆さま、これからも学部生とともに“進化した”院生チームにも変わらぬご支援のほど、よろしくお願いします。ありがとうございました。

2.4 出場選手の言葉

学部生

宮野 健司(2年) 64'00(242位)

昨年の予選会で20kmを走る体力がついていないことを痛感いたしました。

そこでこの1年間、「最低でも予選会で関東インカレハーフマラソンの標準(64分30分)切り、東大記録更新というチーム目標を踏まえ、昨年より2分縮めて63分前半を出す」という目標を掲げて、距離を踏んで常に予選会を意識して練習していました。この1年間を振り返れば、昨年の冬に調子を落としましたが、春先に調子が戻り、七大戦では5000m2位という自分でも予想していなかった結果をだすことができました。しかし、一方で記録の面では自己ベストを更新

した種目はありませんでした。9月の近畿選手権で10000mの自己ベストを出して予選会にはずみをつけるつもりでしたが、33分02秒05と大失速、京大戦でも5000mで14分台を出して予選会にはずみをつけるつもりでしたが、2位という対校順位には満足しつつも、15分16秒29と記録的には「またか」と思う結果でした。これで予選会で64分30秒すらも切れなかったらこの1年間なんやったんやろ...と、ネガティブに考えてばかりでしたが、京大戦後のポイ練での調子は良かったので、関カレ標準は絶対切れる、63分台も出せると言い聞かせてレースに臨みました。

調子が良いことが裏目に出てオーバーペースにならないようにしよう、と心に決めていましたが、いざ号砲が鳴ると、コースのアスファルトの硬さと周りのペースに惑わされ、予定より速いペースで刻んでしまい、最初の5kmが15分27秒で、同様の通過タイムだった焼津ハーフで死亡したことが頭によぎりましたが、あの時の自分とは違うと言い聞かせ、キロ3分10秒程度のペースで走っている集団につきました。10kmの通過が31分17秒15(手元の時計)で、10000mの自己ベストすらも少し上回ってテンションがさらに上がりました。これで関カレ標準を切ることは間違いない、あとはどれほどの記録が出せるか、とワクワクしながら走ることで、前半のオーバーペースからくる疲労を感じないように努力しました。何とか15kmまではそれでごまかしたものの、15km過ぎてふと集中力が切れ、「まだ5kmある...」と弱気になってしまいました。しかし、沿道での東大の皆さま、清里町の皆さま、見知らぬおばちゃんなどの応援のおかげで、何としても63分台を出したという強い気持ちを持つことができ、ゴールすることができました。正式結果は64分00秒でしたが、手元の時計は63分59秒52を指しているの63分台だと思っておきます。今年度、ようやく自己ベストを出すことができ、関東インカレという舞台で戦う権利を得て、今回のレースは満足のいくものとなりました。しかし、前半のオーバーペースという相変わらずの課題もクリアする必要があります。関東インカレまでにその課題を克服しつつ、もう1つの課題であるスピード強化にも努めて、来年の関東インカレには、出るだけで終わらず少しでも戦えるようにします。最

後になりましたが、朝早くからの応援・サポートありがとうございました。

東 大貴(2年) 64'29(259位)

今回は63分台を目標にして、1kmを3分10秒ペースで刻んでいくつもりでしたが、結果は目標に届きませんでした。10kmくらいから脚が重くなってきてしまい、15kmくらいで左脚のふくらはぎがつってしまったので、途中で関東インカレの標準記録を切ることを考えて、ペースを大幅に落としました。ラスト1kmまでペースを落としたところで、もう1度ペースを上げ、なんとかギリギリで関東インカレの標準記録を切ることができました。ゴールした時は、手元の時計で1時間04分29秒だったので、正式記録が判明するまで寿命が縮むような思いでした。標準記録は切れたものの、自分の中では納得のいく結果ではありません。

途中で脚がつってしまったのは、おそらく練習不足が原因の一つだと思います。先月はインフルエンザにかかったこともあり、十分な練習を積むことができませんでした。来月には上尾シティマラソンでハーフマラソンを走るの、今度はしっかりと練習して、納得のいく結果を出したいと思います。

山田 竜也(2年) 65'07(278位)

レースそのものよりも、調整の段階で大きなミスをしました。今年も京大戦で1500mを走ったので、練習量に不安を感じ、京大戦後の月火水とかなりの雨の中練習をした結果風邪をひいてしまいました。結果1日完全に寝込むことになり体力は低下し、またなかなか治らず、当日まで引きずってしまいました。また9月に痛めた左脚ハムストリングスも完治とは言えないまま当日を迎えてしまいました。そのせいでレース前は不安がぬぐえず、またなんでこうなってしまったんだろうと、無責任ながらモチベーションも完全には上がってきませんでした。

ですがさすがは予選会といいますが、東大もちろん、各チームの応援も関カレ並かそれ以上に盛り上がっていて、スタートラインに立つ頃にはもうこれはやるしかない、脚がダメになってももう仕方がないと覚悟を決めました。

レース内容。健太郎さんと3'10"-15"/kmで行くと話していたので、多少前後しながらも10km程までは予定通りのペースで走りました。ただ、

駐屯地を出るあたりから左脚全体がしびれてきて、もつか不安になりましたが、沿道から応援されるたびに、いややるしかないんだとモチベーションを保つことができました。公園に入る手前から健太郎さんに離され出し、ペースが落ち出して心が折れそうになりましたが、ここも何とか応援のおかげでくいとどまり、8-10秒ほど遅れるもそこでとどまります。公園に入ってから、ペースが自然に落ちていくことのないよう意識して走り続けました。15km地点で健太郎さんに再度追いつき、また10-15kmが16'20"と案外まともだったこともあって精神的に回復。ここからも本当に苦しくて、何度ももうだめだ離れようと弱気になりかけますが、そうなる度に健太郎さんが前に出てくれて、また途切れることのない応援に救われて、最後まで走ることができました。最後の5kmも16'26"とそれほど落とさずにまとめられ、総合タイムも、自業自得ではありますが、あまり良くない状態にしては頑張れたと思います。

今回本当に反省すべきはレース前の調整です。練習がうまく積み重なったり、調子が悪かったりすると競技力そのものにも当然影響をもたらしますが、同時に精神的にも「だめかも」と弱気になってしまい、これではまともなパフォーマンスは出来っこありません。この最も大事な大会でそんなことを学んでいるようでは選手としてまだまだだし、引退試合であった4年生の方々にも非常に申し訳ないです。その分は、これからの試合の結果で返していきたいです。今回ほど応援が力になった試合はありませんでした。朝早くから多くの方に応援、サポートをしていただき、本当にありがとうございました。

山田 健太郎 (4年) 65'11 (280位)

今年で3回目、最後の箱根駅伝予選会を走らせていただきました。当初は64分切りを目標としていましたが、京大戦以降からの背中から腰のハリと内臓の不調により、目標を65分台に修正して臨んだ本番でした。

直前の練習で3'10"/kmがつかったため、始めの5kmを3'15"/kmペースで落ち着いて入り、10kmまでは順調に走れました。昭和記念公園に入ってから、背中から足にわたるハリに苦しみ、特に下りでは負担がかかりスピードを上げられませんでした。ラスト5kmはス

タミナ不足も相まって思うように足が動きませんでしたが、切れ目なく続く沿道からの大きな声援、巨大な横断幕に励まされ、最後まで粘ることが出来ました。

5キロ毎のラップは16'11"-16'06"-16'23"-16'31"でした。今の自分の実力通りの走りだったと思います。応援していただいた部員やOB・OGの皆様、清里町の後援会の皆さま、サポートしていただいたマネージャー、当日朝早くから補助員をしてくれた下級生には感謝の気持ちでいっぱいです。

この1年間も怪我に悩まされ、最終学年なのに練習ではチームを引っ張ることが出来ず、対校戦でも後輩に頼りっぱなしでした。この箱根駅伝予選会も下級生主体のチームでしたが、最後に少しでもチームに貢献できたことを嬉しく思います。至らない面ばかりでしたが、4年間本当にありがとうございました。

青木 佑樹 (2年) 67'30 (335位)

目標タイムは66分40秒としました。直前の練習での調子から、達成は十分に可能なタイムでした。しかし、目標には及びませんでした。これには2つ理由があります。

一つは調整を失敗してしまったことです。脚に疲労が残ってしまい、走り始めから違和感がありました。トラック競技と同じ調整をしては駄目だと実感しました。距離を踏みつつも、いかに疲労を残さないかが重要だと思いました。二つ目は、レース中に気持ちが折れてしまったことです。10kmまでは順調にタイムを刻めましたが、その直後に腹痛と便意が襲ってきました。以前の練習から同じ現象が続いていたので、レースに体調を合わせるができなかったことに強い後悔を感じ、あと10kmもあるということでもう無理だと思い、ペースを下げました。ですが、5km過ぎから高田さんと共に走っていたので、高田さんの走りに励まされながらなんとか持ちこたえました。箱根駅伝予選会がチームで勝つレースであることを改めて実感しました。高田さんありがとう。

昨年との比較では、約2分30秒短縮することができました。それは、走り込み量が増えたからです。大きな怪我をすることなく、普段のジョグから、距離走までしっかりこなすことができました。昨年は、15km過ぎからかなりきつ

くなったのですが、今回は脚もしっかりと動き比較的楽に走れましたので、距離走の成果を実感しました。

ですが、課題はまだあります。余力が残っているはずなのにしきれなかったということです。未だに20kmという距離に尻込みしてしまうというのが正直なところで、力のいれどころが分からず、減り張りのない走りになってしまいます。まだまだ走り込みが足りないのでしょう。昨冬は怪我で走り込みができなかった分、今冬ではしっかり走り込んで距離への耐性をつけたいと思います。

最後に東大陸上部OB、OGの皆様、関係者の皆様、その他応援していただいた方々、そして清里町後援会の皆様、どうもありがとうございました。皆様の応援があったからこそ完走することができました。長距離4年生の方々には本当に申し訳ない走りをしてしまったので、来年に向けて頑張っていきたいと思います。

高田 知樹 (2年) 67'54 (344位)

昨年の記録から3分以上もタイムを縮めることができ、チーム内の順位も6位となり合計タイムに貢献することができたと思います。前半の十キロは3分20秒ペースで走ることができましたが、後半の十キロはペースが落ちてしまいましたが、沿道からの応援のおかげで最後までしっかりと走りきることができたのだと思います。

今回の経験と反省を生かしつつ、来年の予選会でも走り記録を伸ばすことを目標に掲げ、次の一年間もより一層精進して練習に取り組んでいきたいと思います。

山崎 貴裕 (4年) 67'58 (349位)

今年は学部生として走る最後の予選会ということで、記録を狙えるようなベストな状態で臨みたいと思っていました。しかし、7月下旬に足底を痛み、休んでも治る気配がなく我慢して走っていたため、他の箇所を次々に痛み、練習を継続して積めない状態での出走となってしまいました。今の体力では前半速めに入ったら確実に潰れてしまい、チームの合計タイムを落としてしまうと思い、3'20"-25"と落ち着いて入りそのままのペースで押していきました。駐屯地を出たところでは前方100mくらいに青木、高田、大久保が走っており、今の体力的に高田と

大久保には勝ちたいと思っていたので、ペースを上げようかと焦りそうになりましたが、後半の追い上げまでじっくりと走ることにしました。15km手前で大久保を捉え、15kmからペースを上げようと思っていたのですが、足は重く3'23"ペースを維持するのがやっとな状態でした。ラスト3kmで高田の姿が見えて追いつけると思いましたが、さすが高田でラスト4秒まで詰め寄るも逃げ切られてしまいました。終始イーブンペースでラストも上げられるだけ上げたので力は出し切ったと思います。4年間の最高の状態でこの予選会を迎えることができなかったのは残念ですが、今の状態でする限りのことはやったので気持ちよく引退することができます。応援・サポート本当にありがとうございました。

大久保翔平 (1年) 68'43 (368位)

河口湖での合宿以降調子は上がっていたので目標は5キロ17分ペースで押して68分切りにしました。ただ調子がいいと思って臨んだ京大戦がダメダメだったので、早々に潰れてしまうことを非常に心配していました。始めの5キロはほぼイーブンペースを刻んで予定より速いタイムで通過しました。「速すぎかな」とも思いましたが無理しているわけでもなかったのでたぶん大丈夫だろうと思いました。そこから10キロ過ぎまでは予定通りレースを進めましたが公園に入ったあたりから徐々に苦しくなり細かいアップダウンもあってペースが落ちてしまいました。15キロ手前で山崎先輩に抜かれた時に「ここで付いたら68分切れる」とも思いましたがあっさり離されてしまい、最後の5キロは非常に苦しかったです。

今回は気象条件に助けられたのもあり、目標には40秒ほど届きませんでしたがある程度納得のできるタイムを出すことができました。しかし順位としては368位で全体では大体2/3に位置します。このことをしっかりと受け止めて冬場の練習をこなして春シーズンに備えたいと思います。

20キロという長いレースの間応援してくださった方々、補助員をしてくださった方々、本当にありがとうございました。

渡邊 駿 (1年) 69'51 (393位)

今回は初めての予選会、さらに初めての10kmより長い距離のレースでした。

今回はチーム内10位に入り少しでもチームに貢献する、そしてそのために70分を切るということを目標に臨みました。ペース配分はイーブンで行くのが理想だと思いつつも、昭和記念公園に入ってから起伏を考えると前半にある程度稼いでおいた方がいいのかな、と思い、前半は3'25"/kmのグループについて行きました。5km通過時点では身体も軽く、余裕があったのでこのままいける!と思い、その後もそのグループとともにいくつもりでした。しかし、8km過ぎで足に疲労が来てしまい、さらに腹痛も起こしてしまい、そこからずるずるとペースが落ちて行ってしまいました。私自身、上りに関しては得意な方である一方で下りが苦手なので下りの度に他の選手に抜かれていく苦しい展開でした。

しかし、ペースが落ちた分15km頃に足に余裕が戻ってきて、さらに腹痛も良くなったので15km過ぎからは逆に他の選手を抜いていくことができました。今季大きな課題であったラストスパートも思い通りに決めることができ、ラスト5kmについてはラップは上がっていないものの、満足いくものであったと感じています。目標であった2つの事項は達成できたものの、結局ラップに見られるように見事に前半飛ばしすぎてしまった形になりました。

現在高校時代の力を取り戻す段階までしか至っておりませんが、怪我なく順調に練習をこなすことができているので、この秋から力を伸ばすことができていると感じています。今後も怪我なく練習を続けるとともにハーフマラソン等で長い距離のレースに慣れてもっといいペース配分をできるようにして、来年の予選会はもっといい走りができるように頑張りたいです。皆様の応援・サポートに心から感謝しております。ありがとうございました。

庄司 健太 (3年) 70'54 (418位)

今回は後半型のレースを想定して、前半は抑えるつもりで3'30ペースを維持していた慶応大の集団について行きました。しかし、10kmを過ぎた頃にはペースを上げる余力がなくなってしまっていました。公園に入っからは、上げていくどころか、ひたすら粘るだけの走りになってしまいました。それも、途中で気持ちが切れそうになりそうな場面が何度もありましたが、その

度に東大関係者の皆様の力強い応援に励まされ、なんとか大崩れせずに走りきることができました。本当にこれほどの応援のありがたみを実感したレースは今までにありませんでした。しかしながら、皆様の応援にも関わらずなんとも不甲斐無い走りしかできなかった自分が情けないです。

70分台というタイムは完全にチームの足を引っ張ってしまったのですが、当日の走りだけを考えれば自分の現状としては妥当なタイムだったと思います。このような結果に終わってしまったことは短期的には合宿以降、調子を崩してしまっただけですが、より根本的には、今シーズンを通じて陸上への取り組みに対する甘さがあったからだと考えています。今後はチームを引っ張っていく最高学年になるわけですから、まず自分の競技に対する取り組みを省みたくて、競技者としての最後の1年に真摯に向き合っていきたいです。

眞田 洸一 (3年) 72'01 (447位)

今年は、夏合宿までは順調に走っていたのですが、そこでの怪我を一月半月ずるずる引きずってしまい、調子が上がらない中で本番を迎えてしまいました。レースも、ゆっくり入ったのですが、それでも7キロから失速して、その後3分40秒ペースを維持するだけで必死でした。情けないと思います。チームのメンバーや、応援してくださった方々に対する申し訳ない気持ちと、悔しい気持ちでいっぱいです。落ち着いたら、また次に向けてしっかり練習をしていきたいと思っています。

中島 圭一 (3年) 76'00 (521位)

今回は3年目にして初めて走らせていただきましたが、派手につぶれてしまいました。3'25"から30の間で押して行って69"でゴールするのを目標にしていたのですが、はじめの5キロですでに苦しくなってしまいペースを守れなくなってしまっただけで10キロ以降は4分/kmくらいまでおちてしまったという感じです。

試合一週間前に話し合いの結果、内定していた野村さんに代わって選手にさせていただいたのにこのような情けない走りをして申し訳ない限りでいっぱいです。今年は春先から調子がよくベストを次々と更新して、夏合宿もきちんと練習をこなせたし合宿後もいい感じで練習を継続

できていました。しかし9月中旬の2泊3日の河口湖合宿の最後の距離走後に膝が痛くなってしまい2週間近く休みましたがなかなか痛みが取れず10月になってしまいました。膝は痛かったのですが練習を再開しないと試合までは絶対に間に合わないという状況になり、どうなってもいいので予選会までは頑張るだけのことにはやってみようと思いました。

再開後、ポイント練習自体は今までと同じ水準でこなせたのですがポイント練習だけでいっぱいいっぱい継続的な練習がうまくできませんでした。そんな中でも、もうやるしかないのでポイント練習を走れていることを自信にして当日はスタートラインに着きました。そして結果は以上のようなものとなってしまいました。今回は初の対校選手という形で走らせてもらいましたが、部員およびOBそして沿道の方々の応援が心に響いて力になりました。このような経験をしてこれからは今まで以上に本気で陸上に取り組まなければならないと切に感じました。幸い私にはあと一年あるのでこの借りはしっかり来年返したいと思います。また4年生が引退したことで最高学年になったのでさまざまな面でリーダーシップをとってチームを引っ張っていただけるように頑張りたいと思います。

本当に応援、サポートありがとうございました。

大学院生

依田 崇弘 (D2) 61'34 (105位)

今年も東大陸上部関係者の皆様のご理解とご支援のおかげさまで、箱根駅伝という夢の舞台に挑戦することができ、大変幸せに思っております。最後の挑戦となる今年こそは念願の箱根本戦出走をかなえるため、最高の準備を以って、予選会のスタートラインに立たせていただきました。レースは、自分の設定したペースを正確に刻み、ほぼ目標どおりのタイムでのゴールとなりました。多少の反省点はありますが、あと十秒以上は速く走れたことは想像できませんので、ここまで自分のできることは、ほぼできたと思っております。今年が私が予想した以上に周囲のレベルが高く、関東学連選抜チームに選出されるかは、どのような選考基準で選抜が行われるかに委ねることとなりましたが、10/19の現時点では、上位の顔ぶれを見る限り、期待を

持って、発表を待っている状況です。選抜チームに選ばれましたら、昨年以上に全力をささげて、本戦出場に挑戦いたします。今後とも温かく見守っていただければ幸いです。

増田 紘之 (M2) 64'35 (263位)

大学院からこちらへお世話になり、今回が二回目の箱根駅伝予選会となりました。過去を振り返ってみますと、ハーフのタイムに換算してみると、実は過去ベスト3に入るタイムでした。私は大学の学部4年生の11月に走ったハーフマラソンがベストで64'32"ですが、自分が長い距離を練習で走れるようになってきたのは3年生の夏合宿の頃からで、トラックシーズンは1500mや5000mを狙っていてロードでハーフを走る機会もあまりなかったからです。4年生では20kmの駅伝でも戦える練習は積めたと自負していますが、結果として自分は箱根駅伝を走らせてもらったことはありませんでした。それは、本番で結果を出せないことが監督に見抜かれていたためでした。力があると認めてもらえてきたのに、起用のチャンスを何度も頂いたのに、それを活かすことができず終いでした。自分の中ではその理由ははっきりとしています。所属していた中央大学の伝統ある練習を信じて、与えられたメニューを信じて、がむしゃらに周りの強い人達の練習に少しでも追いつき、必ずそこにはあるはずのハコネが、近くて遠いのが悔しかったことを覚えています。4年生にして最初で最後のチャンスだったので、箱根駅伝当日も選手が走っているのを素直に応援できずにいて、自分も若かったものです。

これだけ陸上競技に打ち込んできた日々だったからこそ、その悔しさを感じるわけです。しかし、前回や今回の箱根駅伝予選会では大学院チームには申し訳ないですが、その頃の様な気持ちに近づくことはできませんでした。それでも日々の研究生活に重きを置いた、その次には走ることが頭の中にあるのは本当です。運動科学の勉強をしながら、健康志向やアスリートの人達のトレーニング処方を考える中で、自分も身体を動かし続け、運動に対する理解をより深めていきたいと常々考えています。

今回本格的に付け焼刃ながら練習を行なったこの一ヶ月を踏まえた上での結果タイムを振り返ると、来年は時間の問題をもう少しクリアー

すれば、それこそチャンスまで漕ぎ着ける可能性はあると思えました。また当日まで気持ちの持続を心掛けられ、自分への甘さから徐々に結果の悔しさを感じられたのも大学院生チーム、学部生チームのおかげなので、この気持ちを忘れず、来年一年を大事にしていきたいと思えます。最後になりましたが、朝早くから応援に駆けつけて下さったOB・OGの方々や院生の皆さん、サポートしてくれた学部生の皆さん、マネージャーさん、どうも有難うございました。気持ちが切れそうになった後半も、走り続けることができました。

石原 宏尚 (M2) 66'10 (307位)

二日前に風邪をこじらせてしまい、走れる体調ではありませんでしたが東大のユニフォームを着て走るのはこれで最後なので無理を押し走らせていただきました。

タイムは昨年より3分も遅いものとなってしまいましたが、多くの方々に声援を送っていただき、東大での6年間の競技生活が走馬灯のように思い出されました。

ありがとうございました。

北川 裕一 (M2) 66'32 (314位)

修士二年になり、4月-6月は貧血で、7月-10月は研究のスケジュールが過密で練習にはほとんど参加できませんでした。だけど、箱根予選会への強い想いがありましたし、基本的に走るのが好きですので、貧血完治後は朝は8km-14kmのジョグ、深夜に8km-14kmビルドアップ走(orジョグ)を日々行ってました。9月下旬に行われた日体大記録会では10000mを無調整で33分04秒というタイムで走ることができ、体調が少しずつ戻ってきていることを感じ取れました。結局、箱根予選会時まで力を完全に戻すことはできませんでしたが、その分は気持ちでカバーしようと胸に秘めスタートラインに立ちました。結果は16分11秒-16分13秒-16分49秒-17分19秒(66分32秒)でした。最初の10kmは自己ベストで、公園に入るころにはもうすでにフラフラでしたが最後まで気持ちを切らさず走ることができました。このチームですべて夢見ていた箱根予選会を2回も走ることができ、幸せです。そして、多くの応援・サポートがあり箱根

予選会を走り切ることができました。本当にありがとうございました。

加藤 拓也 (M1) 70'40 (413位)

学部時代はなかなか縁がなく、自分にとって初めての予選会だった。

雰囲気呑まれ、最初飛ばしすぎてしまい、2kmですでにバテバテで、もう20km完走できないんじゃないかと思った。50人くらいに抜かれ、東大の後輩にも抜かれて、やっと目が覚め、そこからは持ち味の粘りの走りができた。さらに軽い腹痛もきて、もうだめだと思っていたが、10kmの通過が34'29だったので、あきらめなければまだいけると思い、後半頑張った。後半は大分余裕の走りができたが、生まれて初めての歓声に包まれ、嬉しすぎてつい沿道をきょろきょろと見入ってしまい、集中して走ることができなかった。ラストは、下見をしていなかったためどこがゴールかわからず、やたらと長く感じたが、ラストの応援はものすごく、感動した。

今回の予選会は、直前の風邪とハワイ出張、前半の飛ばしすぎ、集中力の欠損といった、だめな部分がいっぱいあったが、何よりあの応援の中を走れたことがものすごく幸せで、大学院でまた陸上を始めて、心から良かったと思った。箱根予選会を走れたことは、自分のかけがえのない大切な思い出になると思う。そして、学生最後の一年は、今まで雲の上と思っていた高い目標に向かって、今まで以上に全力を注ぎ、走っていかうと思う。

金尾 太郎 (M1) 71'10 (425位)

入部5年目にして初めての予選会出場となりました。レースでは結果として、10km通過で10kmの自己ベストを更新し、後半の10kmでその記録をさらに縮め、大幅な自己新でゴールしました。公園に入ってから途切れなく部員・卒業生の応援が続き、ずっと力をもらい続けることができ、気持ちよく駆け抜けることができました。応援・サポートしてくださった方々には感謝の気持ちで一杯です。

今回院チームの一員として走れて本当に幸せだったと思います。先輩方、特に1年間院チームを率いてこられた竜童さんには本当にお世話になりました。ありがとうございました。

月崎 竜童 (M2) 72'08 (449 位)

今年度、主将を務めさせていただいた月崎です。記録は72分8秒、チーム7番目でした。私自身が昨年の自己ベスト67分00秒から自己ワースト72分08秒と大きく落としてしまい、チームの落ち込みの責任の半分以上を負ってしまいました。昨年の暑さ、今年の涼しさを考慮すると6分はタイムを落してしまいました。

学部時代と違い予選会だけに照準を絞り自由に練習に打ち込めた修士1年、対校戦や大会運営などの部としてのしがらみから開放され、一人の競技者として自由に取り組みました。その反面今年は、修士論文に向け研究が本格化し、初めての国際学会で忙殺され慣れない異文化の中、競技に専念できなくなったのも事実です。また修士1年では自由と感じていたものが、孤独な練習と感じ始め、陸上部のありがたみを、改めて認識させられた1年でした。

修士2年生という時間がない中で真っ先に削られるのは、ウォーミングアップ・クーリングダウン・補強などケアに対する時間でした。私自身9月にケガをしてしまい、またインフルエンザの濃厚接触者として自宅待機する中、精神的ゆとりもなくなりました。

学部時代の同期が社会人として活躍する中、経済的に自立できない中で競技を続ける負い目や、院生としての本分は研究である以上研究室からのプレッシャーは、院生なら一度は感じたことがあるのではないのでしょうか。

競技も研究も、無限の果てまで広がっているこのフィールドを、有限の時間と一つの身体で、どこまで開拓できるのか挑戦し続けたこの2年間。自己記録を更新し競技者としての醍醐味も味わい、また研究生活との両立という難しさも味わいました。

走り終えた今、予選会47チームの中で唯一の院生チームとして出場できたことに、大変感謝しております。OBOGの皆様、院生チームを温かく見守っていただき、ありがとうございました。

Christian Sommer (D3) 72'31 (465 位)

第86回箱根駅伝予選会に参加させていただき、本当に素晴らしい経験でした。

2007年4月から東京大学大学院で博士号をとるために勉強していますが、院生の駅伝チー

ムがあるのは去年の年末初めて知りました。奥多摩駅伝で東大の竜童君と会って長距離チームをご紹介いただきました。毎年箱根駅伝予選会に出ることを聞いた時「僕も走りたい」と思い、12月にスイスで走りすぎ膝を悪くしてしまいました。

2月には別府大分毎日マラソンでぎりぎりゴール出来ましたが、その後4月くらいまでジョギングも出来ませんでした。5月から予選会に間に合えるか心配しながらまたゆっくり練習やってみました。7月からアメリカのロスアラモスでインターンしながら、毎朝1時間以上高地合宿のようにトレイルで運動してだんだんまた走れるようになりました。

予選会の前日アメリカから帰国したので、時差ボケのおかげで早く起床でき、立川公園まで行ってチームと合流しました。ケガとインターンのせいであまりチームと練習出来ず、初めて会う人が沢山いてちょっと恥ずかしかったです。日本で大学生の大会も初めて見て、サポーター、応援団、フラグ、テレビカメラなど、色々なことに感心しました。スタートの3分前はこわいくらい静かで皆緊張しました。スタートするとトップグループは見えなくなりましたが、最初の二周は応援のおかげですごかったです。5キロは予定より少し遅くて18'01でした。その後立川市でも多くの観戦者が応援してくれて「がいじんさんもいるんだー。」って言われましたが「日本人より遅いなー。」って多分思われてました。次の5キロは2回も18'03で良いペースになり、疲れてる選手も追越せたので公園からももう少し速くしたかったのですが、坂道なのでやっぱり遅くなって18'24でした。公園の中でまた応援すごくて厳しいフィニッシュでも楽しかったです。レースの後で初めて反省会見て私も発表させていただいて日本語でレースの話してみました。

先週末のすごい予選会のことは、多分私が死ぬまで子供や孫に話をしたいと思います。皆様本当にどうもありがとうございました。

中村 章吾 (M1) 72'54 (470 位)

今年度9月より入部しました修士課程一年の中村です。今回は、箱根駅伝予選会という大舞台を走る機会を与您にいただきまして、ありがとうございました。

私は、学部時代は阪大で陸上競技をやっておりましたが、院に入ってから環境の変化、学部3年から続いた足の故障、キャンパス(柏)と練習場所である駒場グラウンドの遠さ、等の理由により、一旦は陸上競技をやめてしまいました。しかし、今年の8月に、院生チーム主将の月崎先輩から入部の勧誘を受け、東大陸上部に入部させていただくことになりました。その後、部内で参加標準突破者が増えたため、補欠となりましたが、博士課程2年の村田先輩が肉離れを起こしてしまったため、私が予選会を走ることになりました。

レース当日は、沿道の応援がとても盛大で、これまでの人生で走ったレースの中では最大級だったのではないかと思います。始めを少々速く入ったため、公園内に入ってから失速してしまいました。学部生、院生、OBOGの皆様方からの応援を受けることで、何とか最後まで気持ちを切らさず走りきることができました。記録の方は72分54秒と、過去の自分と比べれば満足できる記録ではありませんが、現状を考えれば納得はできる記録かと思えます。そして、先輩からいただいた貴重な出場権を無駄にすることがなく、無事走りきることができてほっとしています。

私にとって対校戦を走ることは、2年ぶりのことでした。団体競技としての陸上競技の楽しさを再び味わうことができるなんて夢のようです。月崎先輩には、このような機会を与えていただいたことに対して感謝いたします。ならびに村田先輩には、最後の箱根予選会という、大変思い入れの強いであろう状況で私に出場の機会を譲ってくださったことに感謝申し上げます。そして、今回の予選会出場にあたってサポートしてくださった学部生幹部の皆様、飛び入りで入ってきた私を暖かくチームの一員として迎えて下さった長距離チームの皆様、レース中はもちろん、その前後にも多大なご支援を下さったOBOGの皆様、本当にありがとうございました。来年も是非予選会を走りたいと思います、今後ともよろしくお祈りします。

板倉 祥哲 (M2) 73'02 (477位)

今年の予選会は昨年より記録を上回ることを目標に臨みました。上半期はあまり練習を積めませんでした。7月以降は2度に渡る合宿により

かなり調子を上げることができました。本番は涼しい天候にも恵まれ今年は非常に走りやすかったのですがベースの走力の戻りが追いつかず結局昨年とほぼ同じタイムでした。しかしレース中は大勢の方たちの応援を受け走っていて本当に気持ちが良かったです。やはり箱根本戦とまではいかないまでもそれさながらの雰囲気を感じながら走れるということが予選会の醍醐味の一つだと思います。学部生でまだ走っていない人は沢山いると思いますがこの大会は是非走ってほしいと思います。選考会を勝ち抜くのが厳しいと思っている人もいるかもしれませんが結果がどう転ぶかは分からないので最後まであきらめないでほしいですし、私のように学部で走れなくても大学院に進学すれば出場できます。現在の陸上生活が学部で終わるのではなくその先にもつながっていくということを頭の片隅においてこれからも日々厳しい練習に取り組んで下さい。これで私の陸上生活に一区切りがつきましたが、これからは後輩の皆さんの応援をしていきたいです。そしていつかチームで本戦に出られる日が来ることを期待しています。それでは最後になりますが、チームメイトの皆さん、OB・OGの皆さん、その他にもお世話になった多くの方々本当に有難うございました。

松本 光一 (M1) 73'42 (485位)

学部時代に走ることのできなかつた予選会を初めて走ることができるといことで、大変楽しみにこの日を迎えました。キロ3分40秒ペースで刻んで73分でゴールするのを目標に、様子を見てペースを上げてできれば72分で、調子が悪くても74分を目標タイムとしてスタートしました。はじめの5kmは予定していたタイムよりやや速いくらいで落ち着いて入ることができました。自衛隊駐屯地を出てからもそのままの調子で市街地を走れ、公園手前で気持ちペースを上げてみました。公園に入ってからしばらくは快調に走っていたのですが、ラスト6kmくらいの地点でひどい腹痛に襲われました。着地することに腹が痛み、ペースがキロ4オーバーでないかというくらいに落ちてしまいました。しかしながら、最悪でもクリアしないといけない目標(74分)が頭にあったため、そこはクリアしようと根性で立て直しました。上位10人に入れないことは分かっていたのですが、一人当たり3

秒縮めたら全体で30秒速くなると思い最後は死にもものぐるいのスパートをかけ、ゴールしました。75分かかったかもしれない、と時計を見ると73分台の結果でほっとしました。これは第三の目標(74分)を持っていたことと力強い応援のおかげであります。タイムは満足できるものではありませんでしたが、腹痛で潰れた状態から立て直せたのはいい経験になりました。

何はともあれ、練習を積んで予選会を走ることができたことで、陸上を見る目が変わりました。これからも競技を続けていく大きなモチベーションになりました。5000mで18分切れなくて苦勞していた選手でも、走り方を変えてケガをしにくくなり、17分切って予選会を何とか走れるくらいまで記録を伸ばすことを身をもって示せたので、さらに上の目標を目指そうと思いません。

また、次期大学院駅伝主将に任命されたこともあり、しっかりと東大院生チームを引き継いでいきたいです。競技力では他の部員に負けていたとしても、研究活動の中で陸上にどう取り組んで行き、記録を伸ばして行くかという面で見本になり、他の院生だけでなく学部生にも刺激を与えることができれば幸いです。これからもどうぞ、よろしく願います。最後に、応援・サポートありがとうございました。

宮城 和明 (M1) 76'37 (524位)

大学時代は陸上部に所属していなかったため、今回は初の予選会でした。一度は諦めた、”本戦は無理でもとりあえず予選会には出てみたい”と高校時代に思っていた事が実現できて非常に嬉しく思い、また皆様に感謝しております。7月までは入部3ヶ月で高校時代のベストを5000mで30秒以上更新し、予選会の標準記録を突破するなど上がり調子でしたが、8月末に足を痛め、治らないまま調整を続けざるをえなくなり、そのままの出場となってしまいました。出場させて頂いているのでチームに貢献できるよう、チーム10人以内に入るかせめて競るところまでは行きたかったのですが、足の状態も悪く完全に遅れた12人目となってしまいました。そんな状態の中でもなんとか最後まで崩れず走れたのは、皆様の応援のおかげです。本当に力になりました。ありがとうございました。来年は恐らく最後となるため、悔いの残らないよう万全の状態で挑

めるように努力していくと共に、チーム全体を盛り上げて行きたいと思えます。

2.5 試合結果

第86回箱根駅伝予選会

於 自衛隊立川駐屯地～国営昭和記念公園
(H21.10.17)

総合順位		
順位	大学名	タイム
1	駒沢大学	10時間03分39秒
2	東京農業大学	10時間05分02秒
3	上武大学	10時間08分55秒
4	日本体育大学	10時間11分01秒
5	帝京大学	10時間11分20秒
6	城西大学	10時間11分36秒
7	専修大学	10時間11分42秒
8	青山学院大学	10時間12分32秒
9	東海大学	10時間09分21秒 (10時間13分06秒)
10	亜細亜大学	10時間14分35秒 (10時間15分40秒)
11	法政大学	10時間14分58秒 (10時間18分08秒)
以上が本戦出場		
12	国土館大学	10時間16分31秒 (10時間20分01秒)
13	順天堂大学	10時間16分45秒 (10時間20分35秒)
26	東京大学	11時間11分07秒 (11時間11分37秒)
34	東京大学大学院	11時間31分06秒 (11時間31分16秒)

9位以降の記録は、第88回関東インカレの成績に基づくアドバンテージタイムを差し引いた最終総合タイム。括弧内の記録はレースタイム。

個人順位		
順位	名前	タイム
東京大学		
242	宮野健司	64分00秒

259	東大貴	64分29秒
278	山田竜也	65分07秒
280	山田健太郎	65分11秒
335	青木佑樹	67分30秒
344	高田知樹	67分54秒
349	山崎貴裕	67分58秒
368	大久保翔平	68分43秒
393	渡邊駿	69分51秒
418	庄司健太	70分54秒
<hr/>		
		11時間11分37秒
447	鳶田洸一	72分01秒
521	中島圭一	76分00秒
<hr/>		
東大院		
105	依田崇弘	61分34秒
263	増田紘之	64分35秒
307	石原宏尚	66分10秒
314	北川裕一	66分32秒
413	加藤拓也	70分40秒
425	金尾太郎	71分10秒
449	月崎竜童	72分08秒
465	S.Christian	72分31秒
470	中村章吾	72分54秒
477	板倉祥哲	73分02秒
<hr/>		
		11時間31分16秒
485	松本光一	73分42秒
524	宮城和明	76分37秒

3 新監督就任の言葉

新監督 藤田靖浩

この度、寺田監督の後任として、東大陸上部の監督を務めさせていただくことになりました藤田でございます。

2005年卒、三段跳と走幅跳を専門として、大学時代に引き続き、現在も競技を続けております。私自身が現役競技者ということもあり、実業団対抗や各種選手権の際を中心に、総監督の八田先生を始めコーチ、OB・OGの皆様方にいろいろと支えられながらのスタートになるかと思いますが、選手として現役部員とともに同じ目標に向かって練習できるというメリットを最大限に活かし、関東インカレ一部常連校、箱根駅伝出場等の高い目標に向かい、一生懸命頑張りたいと思います。

字数の関係もあり、非常に簡単なご挨拶となり恐

縮ですが、今後とも、東大陸上部への変わらぬご指導、ご声援を宜しくお願いいたします。

(編者より)

藤田新監督には、来年度はじめに発行致します「会報」復刊第五十七号の中で正式にご挨拶をして頂きます。

4 新主将・新女子主将・新主務・新長距離チーフの言葉

4.1 新主将の言葉

新主将 酒谷彰一

来シーズン主将を務めさせていただきます短距離パート3年の酒谷彰一です。伝統ある東大陸上部を率いていくことに対する責任をひしひしと感じるとともに、これからのチームの成長に大きな期待を抱いております。

「日本を驚かせるチームを作る」、これが3年生全員で決めたスローガンです。常に高い意識をもって陸上競技に取り組み、周りの方々を驚かせるような結果を出し続けることで、「大学陸上界に東大ここにあり」と言われるようなチームを目指します。また、そのプロセスとして、七大戦、京大戦の勝利も当然全力で勝ち取りにいけます。

現状のチームに目を向けてみますと、各種目バランスは良く七大戦レベルなら活躍できる選手は多いものの、スーパーエースの台頭が待たれている、といった状況です。当然私も選手としてもより高い舞台で勝負できる選手になりたいと思っております。

東大陸上部には良い伝統がたくさんあります。それをしっかり受け継いだ上で、藤田新監督と共に新たな東大陸上部を作りあげていきたいと思っております。これからも変わらぬご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

4.2 新女子主将の言葉

新女子主将 高山花子

これから1年間女子主将を務めさせていただきます跳躍パート3年の高山花子です。OB・OGの皆様、いつもご指導・ご支援ありがとうございます。今年度は新しく7人の女子部員を迎え、対校戦にチーム一丸となって取り組んできました。主力であった4年

生が引退されたことで寂しいものはありますが、短距離2名、中長距離5名・跳躍2名とバランスがよく、1年生を中心に来年度に期待を持てるメンバーが揃っています。先輩方から引き継いだものを大切に、感謝の気持ちを忘れず、向上心を持って七大戦や京大戦、より高い目標へと向かって女子部員一同努力を継続していきますので、今後とも女子チームをよろしく願います。

4.3 新主務の言葉

新主務 早川晃司

この度、新しく主務に就任いたしました、長距離・競歩3年の早川晃司と申します。昨年からは副務に就任して以来、現在の部活動が成り立っているのも、ひとえにOB・OGの皆様のおかげで指導、ご支援のおかげであることを実感しております。主務の仕事は、OB・OGの皆様と現役部員を繋ぐ、架け橋的存在になることだと思いますので、円滑な部の運営が出来るよう、微力ながら精一杯努力していく所存であります。また、一競技者であることを忘れず、己の心身を鍛えて、対校戦で部に貢献できるよう頑張ります。「ぜひ応援したい」と思っていただけのようなチームを目指していきますので、対校戦の際には、どうぞ競技場まで足をお運びください。今後とも変わらぬご指導、ご支援を賜りますよう、よろしく願います。

4.4 新長距離チーフの言葉

新長距離チーフ 竹俣直道

今年のチームは予選会の目標に東大記録更新を掲げてきましたが、結果は11時間も切れないという残念なものになってしまいました。チームの実力から考えると、この目標は決して高すぎるものではなかったと思いますが、例年(少なくとも私の在学中は)必ずしも選手全員が予選会で力を発揮しきれてはいないことを考えると、選手12人が万全の状態ですべてに臨むことの難しさを痛感します。

私個人の話になってしまいますが、私は5000m、ハーフともにチーム内での最高記録を持ちながら、今年度の対校戦は4月の六大戦を最後に一切出場していません。自分の心の弱さが原因となって走ることが嫌になり、トラックシーズンはほとんど練習をしてこなかったのです。8月から練習を再開したもの

の、体力を戻そうと焦るあまり9月に故障し、結局予選会には出場できませんでした。私が普通に予選会を走っていればチームのタイムが8分近く縮められていたことを考えると、責任は非常に大きいと思います。このような経緯もあり、私が新長距離チーフになることもすんなりとは決まりませんでした。チームの皆はこんな私を信頼して「竹俣にやってほしい」と言ってくれたので、こうして私が新チーフを務めさせていただくことになりました。

こんな駄目な私にパートを託してくれた皆のためにも、そして私が大学に入ってからずっと抱いていた「箱根を走る」という目標のためにも、これから一年心機一転してパート運営と自己の鍛錬に取り組んでいきたいと思えます。これからの練習は、選手全員が自主的に走行距離を伸ばしていけるような足づくりをしつつ、その土台をもとにポイント練習でスピードを養っていく方針です。そして来年の予選会では最低でも10時間台、さらには今年達成できなかった東大記録の更新を目指します。この目標を達成し、さらにその先の10時間30分台の壁を超えないと、箱根本戦への出場争いには絡めません。「再び箱根へ」という、東大陸上部の悲願の達成に向けての大きな一歩を私たちの代で踏み出したいと思えます。OB・OGの皆様方、これからもご支援、ご指導のほどよろしく願います。

5 自己記録更新者一覧 2009.9.13~10.17

9/18-20 関東学生新人(国立)

10000m 早川晃司(3年) 47'55"40

9/26,27 第201回日体長(健志台)

800m 園部竜也(3年) 1'58"72

800m 渡邊拓也(3年) 1'55"70

800m 西川鋭(4年) 2'04"69

800m 横田祥(4年) 2'00"24

800m 須田遊人(4年) 1'58"39

10/3 京大戦(駒場)

100m	鈴木理香 (1年)	13"41(+1.0)
100m	久保木結 (1年)	13"15(+1.0)
100m	西田昂広 (3年)	10"95 (+2.0)
800m	鈴木俊輔 (2年)	2'10"40
5000m	大内田弘太郎 (1年)	16'14"29
110mH	江間輝裕 (3年)	16"12(+0.6)
110mH	増本健太郎 (3年)	15"61(+0.6)
5000mW	早川晃司 (3年)	22'54"52
走高跳	坂本智 (3年)	1m85
走高跳	地子智浩 (4年)	1m70
走高跳	荒井博貴 (4年)	1m75
円盤投	片山卓也 (1年)	29m50
円盤投	佐々木駿 (1年)	36m98
砲丸投	高山花子 (4年)	6m99
砲丸投	寺島孝明 (4年)	9m70
砲丸投	佐々木駿 (1年)	10m75

10/12 秋季オープン (国立)

200m	中嶋毅彰 (4年)	23"81(-1.0)
400m	渡邊拓也 (3年)	51"61
400m	定金駿介 (3年)	49"99
400mH	江間輝裕 (3年)	56"92
400mH	増本健太郎 (3年)	56"25

6 2009年度部内5傑 2009.10.17 現在

男子 100m

1	西田昂広 (3年)	10"95(+2.0)	10.3
2	春日慶輝 (2年)	11"14(+2.0)	10.3
3	都井紘 (4年)	11"22(+0.0)	5.31
4	増本健太郎 (3年)	11"40(-1.3)	10.12
5	中嶋毅彰 (4年)	11"42(+0.2)	5.31

男子 200m

1	西田昂広 (3年)	22"45(-0.3)	8.16
2	拙島一樹 (2年)	22"75(+1.2)	10.3
3	増本健太郎 (3年)	22"82(-2.1)	7.26
4	春日慶輝 (2年)	22"89(+1.2)	10.3
5	真木伸浩 (1年)	23"63(-1.7)	7.26

男子 400m

1	拙島一樹 (2年)	49"47	10.3
2	定金駿介 (3年)	49"99	10.12
3	増本健太郎 (3年)	50"60	9.12
4	大澤涉 (1年)	50"71	9.12
5	赤木裕 (3年)	51"24	9.12

男子 800m

1	渡邊拓也 (3年)	1'55"70	9.26
2	坂井啓一 (4年)	1'56"85	5.31
3	須田遊人 (4年)	1'58"39	9.26
4	園部竜也 (3年)	1'58"72	9.26
5	横田祥 (4年)	2'00"24	9.26

男子 1500m

1	山田竜也 (2年)	4'03"65	7.26
2	東大貴 (2年)	4'04"30	5.31
3	竹内真裕 (2年)	4'08"51	7.26
4	池田剛志 (2年)	4'09"18	5.6
5	渡邊拓也 (3年)	4'13"24	9.12

男子 5000m

1	竹俣直道 (3年)	14'45"00	4.5
2	山田竜也 (2年)	15'03"08	5.3
3	東大貴 (2年)	15'07"90	6.14
4	宮野健司 (2年)	15'15"92	4.5
5	山崎貴裕 (4年)	15'23"34	6.14

男子 10000m

1	宮野健司 (2年)	32'04"65	7.5
---	-----------	----------	-----

男子 ハーフマラソン

1	山田健太郎 (4年)	1:11'06	5.24
2	宮野健司 (2年)	1:12'49	4.12
3	中島圭一 (3年)	1:16'11	4.12

男子 110mH

1	酒谷彰一 (3年)	15"07(+1.6)	7.4
2	増本健太郎 (3年)	15"61(+0.6)	10.3
3	江間輝裕 (3年)	16"12(+0.6)	10.3
4	高木海平 (2年)	16"40(+0.0)	6.7
5	原湖楠 (3年)	19"21(+0.1)	5.3

男子 400mH

1	高木海平 (2年)	55"10	10.12
2	赤木裕 (3年)	55"67	7.26
3	酒谷彰一 (3年)	56"01	9.12
4	増本健太郎 (3年)	56"25	10.13
5	江間輝裕 (3年)	56"92	10.13

男子 3000mSC

1	山崎貴裕 (4年)	9'45"17	7.4
2	青木佑樹 (2年)	9'58"45	7.4
3	野村圭吾 (4年)	10'05"02	4.5
4	庄司健太 (3年)	10'14"09	4.5
5	池田剛志 (2年)	10'19"11	5.3

男子 5000mW

1	早川晃司 (3年)	22'54"52	10.3
2	瀧川朗 (1年)	24'10"77	10.3
3	北沢太郎 (5年)	27'50"64	7.4

男子 10000mW

1	早川晃司 (3年)	47'55"40	9.20
2	瀧川朗 (1年)	49'45"60	9.20
3	北沢太郎 (5年)	52'26"73	5.17

男子 走幅跳

1	西田昂広 (3年)	6m92(+0.3)	8.15
2	廣瀬彬 (4年)	6m44(+0.3)	4.5
3	酒谷彰一 (3年)	6m17(±0.0)	10.13
4	川原拓也 (1年)	6m06(+1.6)	7.25
5	定金駿介 (3年)	6m03(+0.5)	7.4

男子 三段跳

1	廣瀬彬 (4年)	14m38(+1.0)	5.16
2	定金駿介 (3年)	14m21(+0.3)	7.26
3	西田昂広 (3年)	13m84(-0.5)	5.31
4	川原拓也 (1年)	13m16(+0.8)	7.4

男子 走高跳

1	坂本智 (3年)	1m85	10.3
2	荒井博貴 (4年)	1m75	10.3
3	地子智浩 (3年)	1m70	10.3
4	土居富裕 (3年)	1m50	9.12
5	原湖楠 (3年)	1m40	5.2

男子 棒高跳

1	土居富裕 (2年)	3m90	5.31
2	原湖楠 (3年)	3m40	5.31
3	黄晓南 (3年)	3m30	5.31
4	荒井博貴 (4年)	2m00	10.3

男子 砲丸投

1	佐々木駿 (1年)	10m75	10.3
2	原湖楠 (3年)	9m73	6.28
3	寺島孝明 (4年)	9m70	10.3
4	谷彰一郎 (4年)	9m56	7.26
5	片山卓也 (1年)	8m95	9.12

男子 円盤投

1	佐々木駿 (1年)	36m98	10.3
2	片山卓也 (1年)	29m50	10.3
3	谷彰一郎 (4年)	29m48	5.24
4	原湖楠 (3年)	27m44	4.5

男子 ハンマー投

1	寺島孝明 (4年)	41m95	7.25
2	千葉伸宏 (3年)	31m98	10.3
3	今村昌平 (1年)	15m21	7.25

男子 やり投

1	谷彰一郎 (4年)	62m59	5.17
2	千葉伸宏 (3年)	52m55	4.5
3	原湖楠 (3年)	43m39	7.4
4	山東誉英 (1年)	28m75	9.12

男子 十種競技

1	原湖楠 (3年)	4969点	5.2-3
---	----------	-------	-------

女子 100m

1	久保木結 (1年)	13"15(+1.0)	10.3
2	清水蘭 (4年)	13"29(+0.1)	5.31
3	鈴木理香 (1年)	13"41(+1.0)	10.3
4	高山花子 (3年)	13"67(+0.1)	5.31
5	大久保渥子 (4年)	13"96(-0.4)	7.4

女子 200m

1	清水蘭 (4年)	27"90(+1.8)	7.4
---	----------	-------------	-----

女子 400m

1	日下桃子 (4年)	1'00"65	5.31
2	浜松由莉 (2年)	1'08"23	9.12
3	丹家里枝 (1年)	1'11"79	10.3
4	鈴木恵美里 (2年)	1'14"84	7.26

女子 800m

1	日下桃子 (4年)	2'18"65	7.4
2	浜松由莉 (1年)	2'26"80	10.13
3	鈴木恵美里 (2年)	2'41"51	5.31

女子 1500m

1	日下桃子 (4年)	5'06"15	9.12
2	杉浦奈実 (1年)	5'16"35	9.12
3	浜松由莉 (1年)	5'17"40	9.12
4	立岡美夏子 (1年)	5'38"03	9.12

女子 3000m

1	杉浦奈美 (1年)	11'31"62	7.4
2	立岡美夏子 (1年)	11'53"85	7.26

女子 100mH

1	久保木結 (1年)	15"31(+1.2)	10.12
---	-----------	-------------	-------

女子 走幅跳

1	高山花子 (3年)	5m06(+2.0)	10.3
2	大久保渥子 (4年)	4m51(+0.7)	7.26
3	清水蘭 (4年)	4m05(±0.0)	9.12

女子 走高跳

- | | | | |
|---|-----------|------|------|
| 1 | 丹家里枝 (1年) | 1m43 | 7.26 |
| 2 | 鈴木理香 (1年) | 1m25 | 7.26 |

女子 砲丸投

- | | | | |
|---|-----------|------|------|
| 1 | 楠木千尋 (4年) | 8m36 | 10.3 |
| 2 | 高山花子 (3年) | 6m99 | 10.3 |
| 3 | 岩上佳世 (1年) | 6m28 | 9.12 |

女子 円盤投

- | | | | |
|---|-----------|-------|-----|
| 1 | 楠木千尋 (4年) | 18m36 | 7.4 |
|---|-----------|-------|-----|

女子 やり投

- | | | | |
|---|-----------|-------|-----|
| 1 | 楠木千尋 (4年) | 23m13 | 7.4 |
|---|-----------|-------|-----|

女子 ハンマー投

- | | | | |
|---|-----------|-------|------|
| 1 | 楠木千尋 (4年) | 27m05 | 5.17 |
|---|-----------|-------|------|

7 主務より

主務より 5点ございます。

7.1 応援OB・OG紹介

10月3日(土)、駒場グラウンドにて行われました京大戦に際し、応援に駆けつけて下さったOB・OGの皆様のご氏名を報告いたします。(敬称略)

1948年卒 山崎英也
 1952年卒 澤島政行
 1955年卒 浅澤誠夫
 1957年卒 古寺博
 1957年卒 西尾弘二
 1957年卒 藤田宏明
 1960年卒 稲葉滋
 1960年卒 梅田圭良
 1960年卒 笹治峻
 1962年卒 相馬光之
 1963年卒 浅野勝己
 1963年卒 井上尚男
 1963年卒 興津誠
 1963年卒 篠原健
 1964年卒 中塚晴夫
 1964年卒 八島秀雄
 1965年卒 石堂怜
 1965年卒 井原鉄雄
 1965年卒 渡部一之
 1966年卒 上田裕一

1966年卒 土谷喬
 1967年卒 林義之
 1968年卒 小林寛道
 1968年卒 湯浅味代士
 1969年卒 青木征彦
 1969年卒 森茂雄
 1970年卒 横坂敏彦
 1973年卒 横田逸郎
 1974年卒 栗明純生
 1975年卒 鈴木正保
 1976年卒 田上静之
 1979年卒 中谷敬二
 1980年卒 山本利徳
 1981年卒 野田晴彦
 1982年卒 溝口勝
 1982年卒 室城信之
 1983年卒 秋守利郎
 1983年卒 八田秀雄
 1984年卒 和泉芳嗣
 1984年卒 太田充男
 1984年卒 半田禎
 1984年卒 渡辺典之
 1988年卒 井上裕司
 1988年卒 安井章
 1991年卒 小野満
 1993年卒 桜井亮太
 1994年卒 神田潤一
 1994年卒 工藤麻衣子
 2000年卒 渡辺国広
 2003年卒 川添雄太
 2003年卒 川添祐佳
 2003年卒 高梨幹生
 2005年卒 浅野晃平
 2005年卒 藤田靖浩
 2007年卒 新井邦生
 2007年卒 岩永将太
 2007年卒 小原明恵
 2007年卒 向田恵
 2008年卒 板倉祥哲
 2008年卒 月崎竜童
 2008年卒 持永新
 2008年卒 山本卓典
 2009年卒 加藤宏平
 2009年卒 北川昂広
 2009年卒 小福田大輔
 2009年卒 菅野雄大

2009年卒 千徳恒憲
 2009年卒 原尚史
 2009年卒 福田篤
 2009年卒 堀内敦史
 2009年卒 和田光一郎

また、10月17日(土)、昭和記念公園にて行われました箱根駅伝予選会に際し、応援に駆けつけて下さったOB・OGの皆様のご氏名を報告いたします。(敬称略)

1957年卒 古寺博
 1976年卒 田上静之
 1982年卒 中山亨
 1983年卒 小林徹
 1983年卒 八田秀雄
 1992年卒 松浦幹太
 1994年卒 神田潤一
 1994年卒 工藤麻衣子
 1996年卒 柴田大朗
 1997年卒 半村哲
 2001年卒 近藤航介
 2001年卒 中台慎二
 2001年卒 新妻拓弥
 2003年卒 相原佑康
 2003年卒 高梨幹生
 2003年卒 橋本武
 2003年卒 山崎智裕
 2004年卒 田坂和彦
 2005年卒 浅野晃平
 2005年卒 池田大行
 2005年卒 桑原明
 2006年卒 稲垣誠
 2006年卒 吉田和敬
 2007年卒 片岡哲朗
 2007年卒 木村栄三
 2007年卒 黒澤徹也
 2007年卒 小峰輔
 2007年卒 鈴木崇人
 2007年卒 山崎大
 2008年卒 大村泰平
 2008年卒 片山芳明
 2008年卒 北岡祐
 2008年卒 斉藤俊
 2008年卒 中山陽右
 2008年卒 持永新
 2008年卒 山本祥

2008年卒 山本卓典
 2009年卒 大島淳
 2009年卒 梶井駿介
 2009年卒 加藤宏平
 2009年卒 倉員智瑛
 2009年卒 小福田大輔
 2009年卒 齊藤甲次朗
 2009年卒 和田光一郎

ご多忙の中お越し下さいましたことに、現役部員一同、心より御礼申し上げます。

7.2 行事予定

今後の行事予定をお知らせします。

- 第9回東大競技会
10月31日(土)、11月1日(日) 駒場
- OB・OG ゴルフコンペ
11/15日(日) 川崎国際生田緑地ゴルフ場
- 倶楽部総会
2010年3月1日(月) 山上会館
- 第10回東大競技会
未定(グラウンド検定のため)

7.3 学生幹事の交代

学生幹事の交代をお知らせいたします。

- 主将 廣瀬彬 酒谷彰一
- 主務 坂井啓一 早川晃司
- 女子主将 日下桃子 高山花子

7.4 連絡先(慶弔等)

慶弔のご連絡は下記連絡先までお願い申し上げます。

総務委員長:田上静之

TEL: 03-3835-6792

(凸版印刷株式会社経営監査室)

E-mail: seishi.tanoue@toppan.co.jp

学生主務:早川晃司

〒 181-0013

東京都三鷹市下連雀 3-39-11

TEL : 090-5761-9980

FAX : 0422-47-8726

E-mail : shumu@uttf.org

7.5 その他

・この部便りは下記 web ページでもご覧になれます。

<http://www.uttf.org>

・部便り郵送不要の方は、お手数ですが学生主務までご連絡下さい。

・また、現在陸上運動倶楽部のメーリングリスト「uttfcclub」にて、大会結果の速報および部便りのメール送付を行っております。メーリングリストへの登録をご希望の方は、お手数ですが学生主務までご連絡下さい。

以上です。今後ともご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

主務 早川晃司

8 編集担当より

シーズン終了に伴い、「部便り」編集担当も代替わりとなります。「部便り」編集担当の職を先代の田中先輩から受継いだのは1年前のことでした。本誌は'LATEX'と呼ばれるマークアップ言語を利用して作成しておりますが、根っからの文系人間の私には複雑怪奇、その他記録の収集・整序といった一般的な業務に於いても、1年間不手際の連続でありました。しかし私にとってのただ一つの強みは、未熟者を支えてくれる優秀な同輩・後輩に恵まれた幸運でした。時には発送終了後に凡ミスに気づくこともありましたが、OBの皆様には辛抱強く読んで頂き、どう御礼を申してよいかわかりません。本当に、お世話になりました。

末筆ながら、今後の陸上運動部・倶楽部の益々のご清栄を祈念致しまして、お役御免といかせて頂きたく思います。

柴田渥史